

360

441



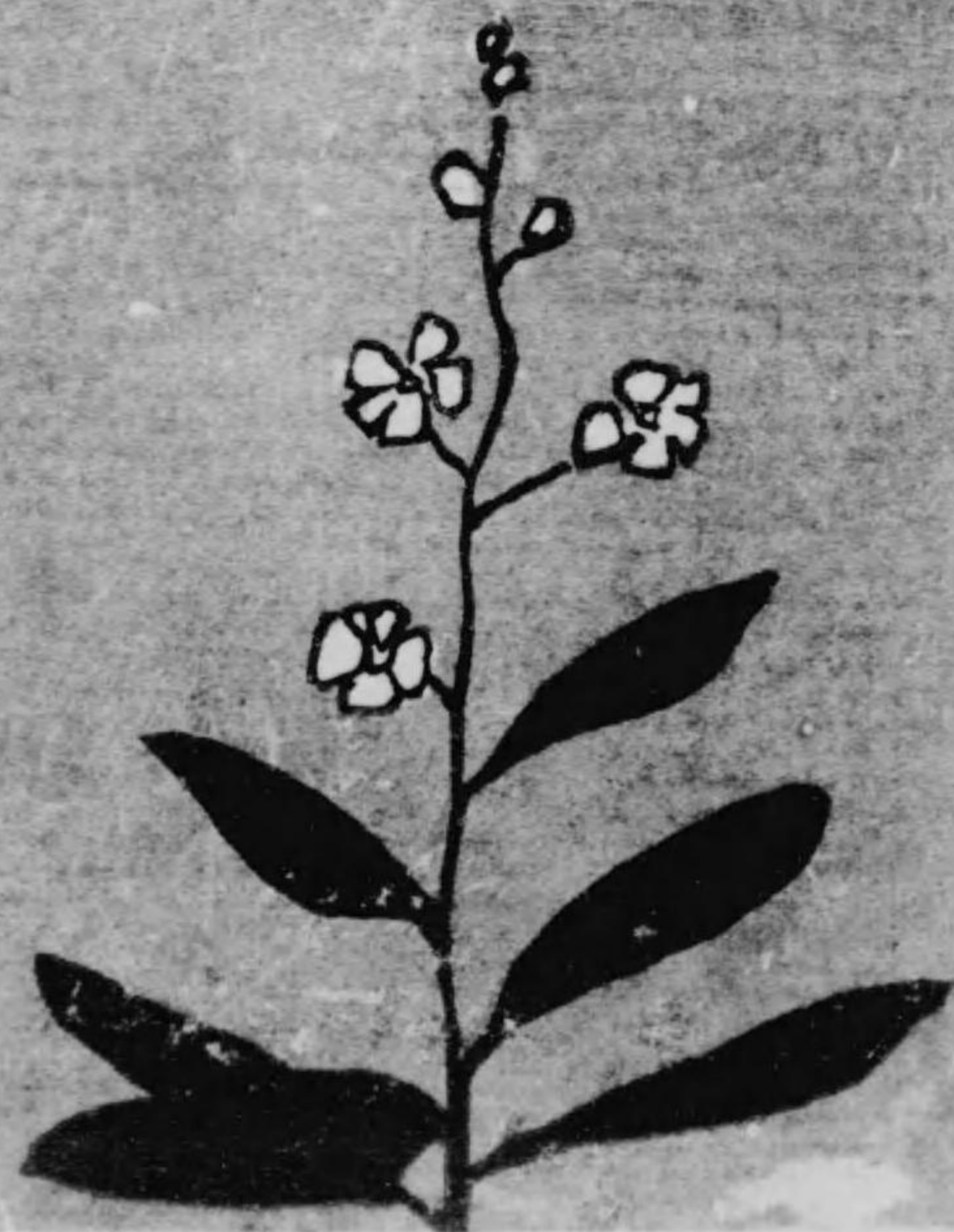
始



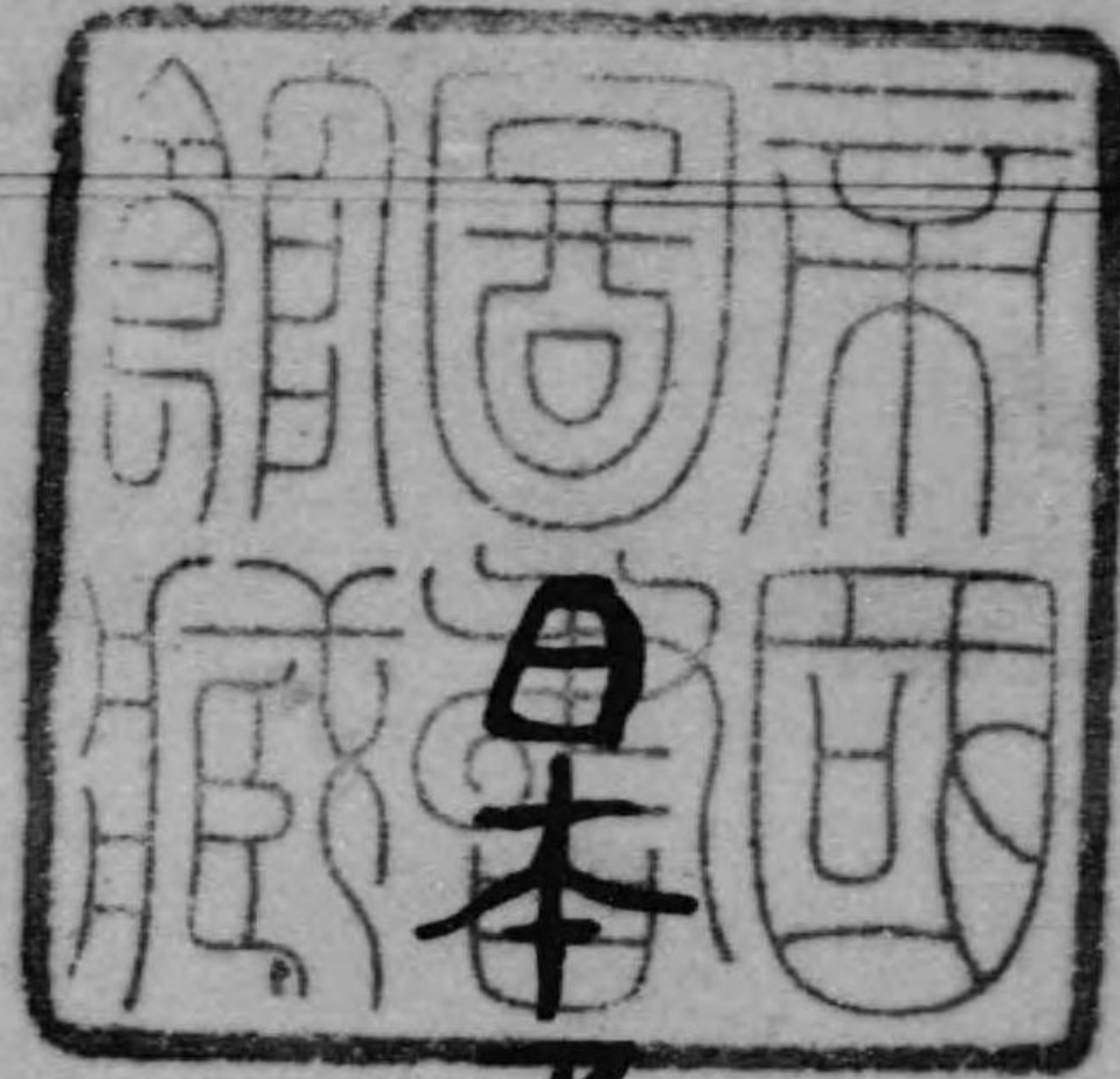


へスブルア本日

若穂空冊室



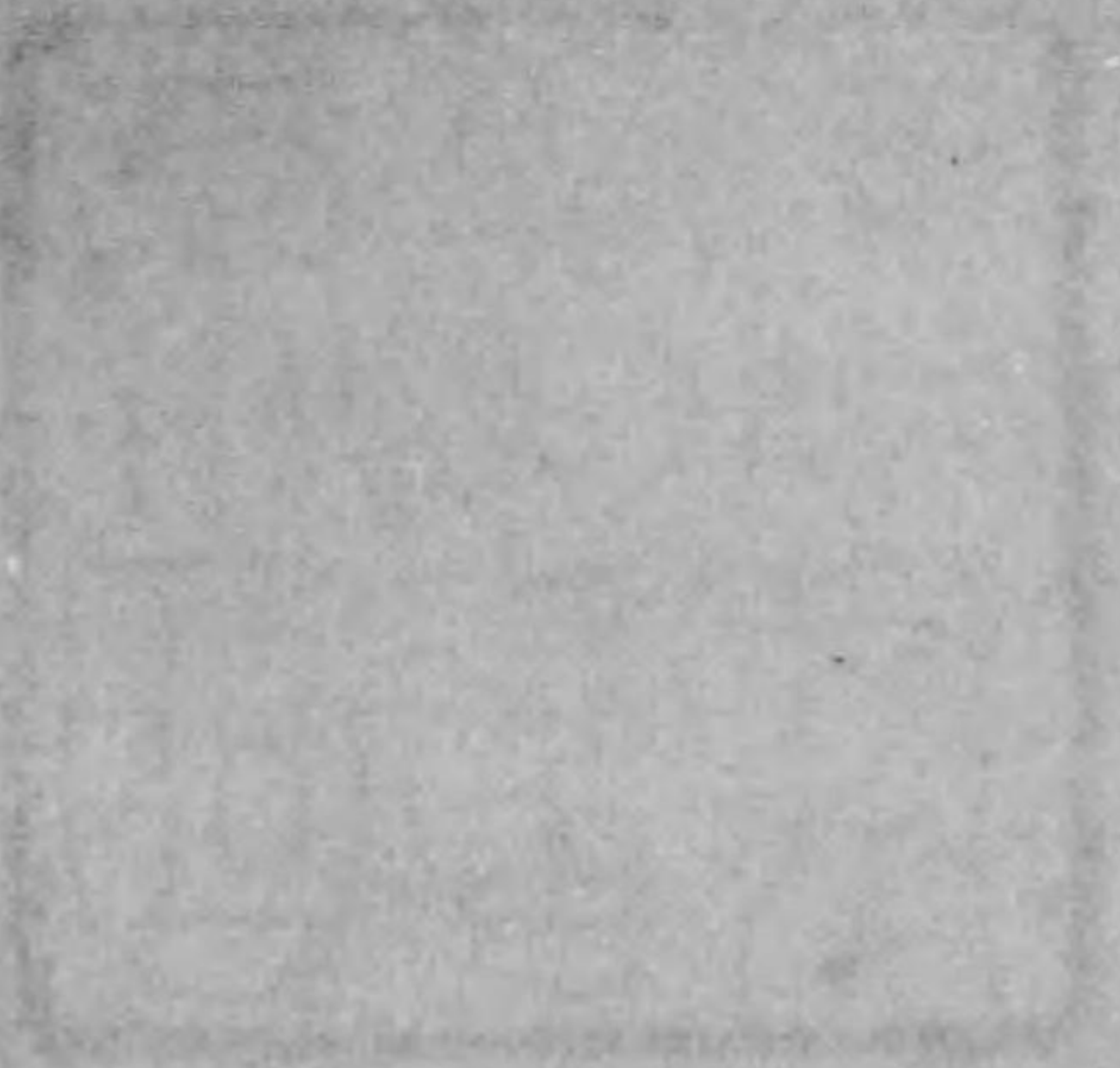
360-441



ルプスへ窪田空穂

大正
5. 7. 8
内交

雪残の岳ヶ箱





望眺の峰連山高穂





淨土山に見ゆる岳

1911

日本アルプス

雪をすくめては

水は味がある

文は

よ

よ

序

日本アルプス中の一高峰である槍ヶ岳へ登らうと思ひ至つて、東京を出たのは大正二年の八月であつた。

私は信州の松本平に郷里を持つて、そこに青年期までを過して来たので、日本アルプスの連峰は不斷に眼にしてゐた。用水としてゐた梓川の水は、その源を槍ヶ岳の雪溪に發してゐるといふので、槍ヶ岳といふ名は殊に親しいものに感じてゐた。が親しむといふ事は、同時にそれに對する好奇の念を薄らげる事であつた。私は槍ヶ岳へ登らうなど、いふ事は、思つて見た事さへもなくして過ぎた。

日本アルプスといふ名は、いつか一般的な名となつて来た。私の記憶からいふと、明治二十四五年の頃、私の父が、そこが牧場として適當な場所か何うかを見ようとして一度行つた事であつた上口が、今は上高地の谿谷と呼ばれて、天下の絶景であるやうに唱へられてゐる。又明治三十四五年の頃、小島島水君から、私の郷里に近

い邊だからといふので、その谿谷へはいる路順を尋ねられて、島々までの路順を説いた事があつたが、その後同君の筆によつて、日本アルプスの高名にされた事は甚だ多い。

年々の夏に、私は日本アルプスの紀行を讀んで、いつか一度は行つて見たい、幼年の時から馴染である山を、一度は親しく踏んで見たいといふ望みを起した。

西村醉夢君の槍ヶ岳登山の話は、頻りに私の心をそゝつた。私はその望みを事實にしようと思ひ立つ日が來た。

友人で、旅行好きである谷江風君が、「君が行くなら」といふので、同行する事になつた。

差間があつて一と足おくれるといふ谷君を置いて、私は一人で出懸けた。途中を郷里に立ち寄つて、妻の父を誘つて一行に加へる事にした。

上高地へと志して、松本、島々を過ぎて、八千尺の徳本峠を越して、穂高岳を眼前に仰ぎ、上高地の谿谷へ踏み入つた時には、山國に育つて山は見馴れてゐた私も、

驚嘆を禁じ得なかつた。相對して時立つてゐる日本アルプスの連嶺と、その谿谷と、谿谷を流れてゐる梓川とは相待つて、云ひ難い莊嚴と、捉へ難い纖維とを示してゐた。私はその谿谷の一軒家に、慌しく過ぎて行く物を見るやうな見飽かない心持で幾日かを過した。

谷君は來た。それにその一軒家には、T君、I君、M君と、東京に住んでゐる三人の洋畫家が偶然にも落ち合つた。私達はその爲に、更に楽しさを加へる事が出来た。

全山焼けたいれてゐる焼岳の、絶頂の噴煙の中に立つた時の心持、槍ヶ岳の頂上に立つて、烈風と、烈風に狂ふ濃霧とを巖角に避けて、重疊しつゝ、遠く岨なく、丁度波浪のやうに續いてゐる山脈に連つて、直ちに富山、淺間などの高峰の寂しく空に浮んでゐるのを望んだ時の心持は、全く言葉を絶したものであつた。私は怖るべき自然と面接して、言葉を失つたものとなつた。

この紀行は、その旅を終へて間もなく、記念にと思つて、書いたものである。「焼岳」

4
の前半と『明神の池』とは後から記憶をたどつて書き足したもので、寧ろ無い方が
いゝと思はれるものであるが、案内記の性質を持つたものだからと思つて加へて置
いた。

この紀行を読まれる人の中の一二の人でも、これによつて遊意を起されて、私の
経験して忘れ難いものにしてゐる、上高地の谿谷の感、焼岳槍ヶ岳などの絶頂の感
を味はれる人があつたならば、この小著の望みは足りる。私はそれを願ひつゝも、
自身の筆を嘆じずにはゐられない。

大正五年六月

窪田空穂

目次

槍ヶ岳登山記	三
焼岳登山記	七三
日本アルプスへ	一〇五
徳本峠越え	一二九
上高地の谿谷	一四五
田代沼	一五五
明神の池	一八一
附 録	
上高地の谿谷にて詠める	一九七

槍ヶ嶽登山記

瀬の音が微かに耳にはいつて來ると眼が覺めた。雨戸のない部屋のうちはもうしらくと明るくなつて居た。谷君は寒さうにまゐりなつて、蒲團をかぶつて眠つてゐた。

そつと障子をあけて私は廊下へ出た。

曙の明るさは、靜かに保たれてゐるものゝやうに、谿谷に漂つてゐた。見上げる
と狭い空には少しの雲もなかつた。前面の霞澤の山々は、ほの白い霧をまとつて、
うるほひ渡つた暗緑の峰々は、今朝は不思議な静けさとなつかしさを示してゐた。
白樺と柳と榛の樹立から出來てゐる低い林の蔭から、深碧の流れは白い漣を立てな
がら流れ出してゐた。その水は、幅の廣い、石の白い河原の上をゆるく流れながら
此方へ下つて來た。

3 空氣はしつとりとして、秋の朝のやうにひや／＼と肌にはさはつた。

私はこゝへ来た初めての朝のやうに、この谿谷の保つてゐる不思議な明るさと、不思議なしなやかさとに見とれてしまつてゐた。

『お早う。——大丈夫だね、天気は。』

谷君は後ろから聲を懸けた。天気を氣づかつた言葉のうちに、緊張した心が感じられた。暫く廊下へ立つてゐたと思ふと、せはしさうに梯子段を下りて行つた。やがて湯壺にはいつてゐる谷君の姿が、ほの暗い浴室を通して見えた。……勞れるだらうに、と思つて私は廊下から見下してゐた。

朝の膳が運ばれた。いそがしくしまふと私たちは支度にかゝつた。

『金は何うしようね?』

脚絆くわばんをつけてしまつた谷君は、さう言つて私を見た。

『いらぬいさ。——誰かに預けて行かう。』

『少し持つて行かう。小屋でいるかも知れないから。』
『ほうだね。』

谷君が紙入の中を改めてゐるうちに私は部屋に散らばつてゐた物を掻き集めた。甥しやくの持たせて出した氷砂糖のまだ残つてゐたのを二つ分けにした。舅しやくの残して行つた鯉節こひせつを、持つて行かうか何うしようかと迷つた。

『何うしよう、此れ?』

『持つて行きたまへ。——此れだけ、ね?』

と谷君は、銀貨のいゝ加減てのひらを掌てのひらに乗せて見せて、隠しへをさめた。

帳場から知らせに来るだらうと心待ちにして茶を飲んでゐたが、待ちきれなくて下りて行つた。下りしなに、風呂敷包を隣室に持ち込んだ。I君は床のなかに眼をあいてゐた。

『もうお出懸け?』

私は包を頼んで、その並びのI君とM君の部屋へ外とちから聲を懸けた。

5
梯子段の下したの、がらんとした板の間は、まだ薄暗かつた。圍爐裏には太い丸太がくべられて、とかくとと赤く燃えてゐた。帳場では主人が氣忙しさうに立つたり据

わつたりしてゐた。

『おい、草鞋！』

急ぎ込んだ主人の聲に、雇人と見える年寄は、恐ろしく岩乗な草鞋を持ち出して来た。

『案内は？』

『へえ、』と主人は、門の方へ指さしをした。案内はもう外へ出て、私たちを待つてゐるのだと知れた。

草鞋を穿いて土間へ立つと、寒さうにしながら三人の仲間は見送に來てくれた。

『行つてらつしやい、』とI君は笑顔を見せると、

『お大事に、』とII君は心もどなさうに私たちを見た。

『御苦勞様ですね、へ、へ。——お大事に。』

尖つた主人の聲に送り出されて私たちは家を離れた。

案内と、同行者と見える人たちは、浴室の彼方の、小さな橋の所に待つてゐた。

體の隠れる程に高く荷を背負つてゐる案内の後姿と、かひなくしい旅支度をした人たちの姿は、妙にさみしいものとなつて見えた。

一緒になると、紺セルの詰襟の服に半ズボンを穿いて、糸だてを巻いて肩がけにした二十五六の青年は、笑顔を私たちに向けた。

『御一緒に願ひます。』

『何うぞ。』

その青年と少しもちがはない服装をした二十歳ばかりの青年がゐた。今一人、麻の詰襟を着て、手には御嶽道者の持つ金剛杖をついた二十四五の青年がゐた。その人は大きな雜囊を背中にしよつて、まだ眞新しい檜木笠を二つまで其上にぶら下げた。

同じ旅をする者の間にだけ湧く特殊の親しみを私はその人たちに感じた。

『出懸けるかね。』

案内は振返つて私たちを見た。銅のやうに日にやけた若い顔をした男であつた。

素氣そけいのないなかに無邪氣むじゃきさが感じられた。

案内は先に立つた。私、谷君、三人の青年と續いた。細い一筋の道は、一列をつ

くつた一行を導いた。瀬の音の澄んで聞えて来る河原の岸には、白樺と柳とが低くついで居た。一方は山裾の草原であつた。緑のうすい木の葉も草も、しつとりと夜露にぬれて洗はれたやうになつて居た。その草原の中にひよいと、柳草やなぎぐさ——莖も葉も柳の枝にそ

誰も物を云ふ者はなかつた。しどくと、うるほつた土を踏む草鞋の音が、高い

瀬の音にまじつて寂しく耳に附いた。

『案内の足跡を踏んで行きたまへ、大分遠ふからね。』
谷君は後ろから、いたはるやうにいつた。

ゆつくりと足を移して行く案内の背中の荷物に眼をやつたまへ、私は歩いて居た。昨夜持つてゐた槍ヶ岳へ對する軽いあこがれ心は、今現にその山に向つて一步一步

あゆみを移してゐる私の心からは、不思議にも消えたやうになつて居た。私の胸は、重い躍らないものとなつて居た。

移つて行く一歩々々、妙にはつきりと感じられる一歩々々の移りの中に私は居た。

白く塗つた長い吊橋が見えて來た。と、それを越して穂高岳ほたかだけは嚴かな姿をや、あらはして來た。それに對つた霞澤岳かすみさわだけも、遠く深く、見えなかつた連峰を見せて來た。

案内は體からだに調子をつけて、ゆつくりとした、おれたい程ゆつくりとした歩き方を續けてゐる。

二

馬小屋——徳本峠とくほんとうげの麓にある——に近くまで來たと思ふと案内は、つと河原つゞきの森の中へと下りて行つた。白樺と柳の老木は幹を並べて、眞つ直に、高く／＼伸びて、幹に合せては小さい、まるい、笠のやうに見える梢で初めて日光に逢つてゐた。林の中は明るかつた。花崗石かかげいしのくづれから出來た砂地の上に附けた路は、青

草に挟まれながら續いて行つた。紫の花をつけた兜菊がむらがつて咲いてゐた。それに似た釣鐘草に似た花をつけた草もまじつてゐた。

ほがらかな鳥の聲が聞えた。同じ所から動かずに啼いて居た。

『時鳥が啼いてゐるね。』

谷君はさう言つた。眞つ白な白樺の幹が眼に入るばかり、鳥の姿は見えなかつた。林を離れると、断崖の上に出て來た。

河原は遙か眼の下にあつた。しろくくと廣い河原は、水上は直ぐに青山に隠されて居た。山と山とは重なりあつてその一角を見せてゐるばかり、日光は明るくふるへてはゐるが、もう方角も分らなかつた。ひやくとした、底に荒さを含んだ空氣は、深山といふことを感じさせた。

案内はつと立ち止つた。絶壁に沿つた細い路は、昨日までの雨にすつかり土を流されてしまつたと見えて、二三間の間、全く路の形を失つてしまつてゐた。直立したといふよりもむしろ、彎曲した岩は、ぼろくそこぼれて、そのかけらを遙か下

の河原にまで落してゐる。中途でとまつたかけらは、それでも足をかければかけられるやうには見えた。

案内は岩に手をかけて、片足を伸して、そつとかけらの積み重ねを踏んで凹みをつけた。また片足を伸して同じやうにした。同じことを繰り返して、最後のひと跨ぎは大きく跨いで、ひよいと向うへ越してしまつた。そして彼方側に立つて、平氣な顔をして、私たちの越して行くのを待つて居た。

一人二人越した後に私もつゝいた。踏むと共に草鞋の下で小石はくづれる。身を傾けて岩に縋ると、その岩もくづれる、爪先より外には眼を移すまいとしつゝ、全身の力を其所へ集めつゝ、一氣に走つた。と何時か向うの路に立つて居た。

金剛杖を持つた青年は最後であつた。

『杖をお出さない！』

谷君はさう言つた。杖の端と端とが二人の手に持たれた。ざらくと小石のくづれる音の高く聞えた時には、青年は辛くも路の上に立つて居た。

にこくして見てゐた案内は一行が越してしまふと、黙つて歩き出した。何時か路は河原に下りて行つた。水の上に頭を出してゐる石から石へと飛んだ。低く眼下に見える石へはねらひを附けて飛んだ。

『あつ！』と私は聲を立つた。私の前へ立つて行つた眼鏡をかけた青年は、足をすべらして大きな石と石との間に倒れた。脚は水の中につかつた。慌て、起ち上つた青年を見て私はほつとした。私たちは河原を歩んで居た。石は草鞋を噛んだ。立ちどまらなければ眼は擧げられなかつた。

前の者が立ちどまつた。見ると其所には大きな石が流れを前にして並んで居た。案内はその一つの上へ腰を掛けて、のけざまになつて荷物を石にもたせかけて居た。『此れから川ぢや。』案内は無邪氣な顔に、多少の矜りをまじへて言つた。

川を徒渉するといふことはI君から聞いて居た。それは山の中の溝を渉るのだからと思つてゐた。この川を渉るのかと私は今更のやうに流れを眺めた。流れは谷川の早さをあらはして、青い水は白く碎けてゐた。石に腰を掛けて見渡すと川幅も狭くは見えなかつた。

それと一しよに私は、初めて槍ヶ岳への路の何ういふ路であるかをも知つた。細いながら一すぢの路があるだらうと思つたのは空想であつた。この溪流に沿つて河原を歩む以外には、流れを挟んでゐる兩方の山には、恐くは獣でなくては踏み行き得る路はないのだから知つた。

實際、河原の兩岸の山は、全く岩の積み重ねとなつて、急な傾斜を排して、河原に落ち込んでゐた。そのとつばなの岩は、眞つ青な樹立に蔽はれてゐた。私たちのゐるのは、その一番底の岩の、或る木蔭であつた。

しらくと迷つて来る日光に青葉は青く光つた。河原の石は白く光つた。しんとした中に、寂しく澄んで瀨の音は聞えた。私たちの眼は自然に、懐かしいものに引

んで流を挟む兩岸の山へ

物々しく
止りなかつた。
河原に落ち込んでゐた。

き寄せられるやうに、仰向いて見て漸く見える空の青さは向けられた。
黙つて、石の上に腰を掛けてゐる一行六人の姿が寂しいものとなつて見えた。

三

案内は河原の石を踏んで進んで行つた。其所には曾て人の踏んだことを語る何のしるしもなかつた。案内の後姿を見ると、自身の通路を間違へないといふ深山の獸を思ひ出した。

案内者は振り返つて、黙つて私たちを見た。そして、ざぶりと大跨に、光りつ、前を流れてゐる梓川の水の中にはいつて行つた。ざぶんと音を立てながら、倒されまいとするやうにしながら渡つて行くその後姿を私たちは見てゐた。膝を没した、膝から上まで没した、荷物の下の方は水に濡れようとして來た。

私はその跡についた。水勢は足を拂はうとした。冬の水にも似たつめたさは、脚絆を透して骨にまで染

みて、一瞬々々感覚を氷らせるやうに感じられた。が、澄みきつた水はその底に、丁度築庭の飛石のやうに適宜の間隔を置いて轉がつてゐる大きな石を、ゆらめく水を透して鮮かにうかいはせた。私の全力は足の底に集つて居た。すべつたら起きられないと思ひつゝも私の眼は、ゆらめく水と共にゆらめく石へと移つた。

『さうぢやん！石の上を飛ぶんぢや！』と案内の聲が聞えた。

感覚が失はれさうだ、と氣附いた時には私は河原に立つて居た。

谷君は最後になつた。見てゐるとつと川上の方へと、流れを見ながら上つて行つた。やがて流れの中にその姿を見せた。

『却つて深かつたよ。』と、一しよになると谷君は云つた。そして怖れを壓へた眼をして笑つて見せた。

路は河原に離れた。それは両手で樹の根にすがつて攀ぢ登るやうな險しい所であつた。そしてまた樹の根に縋り下りつゝ、見ると、その真下には水流が鳴つて居た。濡れた足の感覚がもどにかへつた時には、一行は又前のやうに流れを横切らなく

てはならなくなつて居た。

河原を脇に見て、一行は熊笹の中を歩いて居た。暗い密林の下生えとなつてゐる熊笹は、頭よりも高く伸びて、そして何所までも續いて居た。前へ行く者が杖と手で押し分けた笹は、ざわ／＼と鳴りつゝ直ぐにしなひかへつてその人の體を隠した。足は伏してゐる笹に拂はれ／＼した。

ざわ／＼と音を立てつゝ、見えつ隠れつして進む一行は、それはをり／＼此の山路で出逢ふといふ熊を思はせた。

日光の遠いので、顔に觸れるつめたい空氣とは、一行の心を暗くした。誰も聲を立てる者もなかつた。

明るい河原へ出ると、ほつとした。言ひ合せたやうに立ちどまつた。

『ひどいね——』

谷君は驚きを眼に見せて私を見た。

『熊路だ。』と私も呟いた。

『もう河は渡らなくていいのかい？』と、紺セルの年上の青年は案内に聞いた。

『まだ、／＼。』と案内は首を振つた。

谷君は口を入れた。

『六回渉るんだつて聞いたが、もう六回も、もつとも渉つたよ。』

案内は笑つて、

『うゝん、——浅いのは勘定にやはいらんものね。』

『さうか、』と谷君も苦笑した。『ちやまだ何遍渉るの？』

『さうぢやねえ。』と案内は物を考へるやうにして、『あと二度かな……。』

『驚いたな！』と案内の顔を見詰めて居た青年は投げ出すやうに言った。『全くつめたくてやりきれないからね。』

四

河原は曲つた。俄に兩岸の山は迫つて來た。大きな滑かな岩は幾つも流れの中に

据わつて、小さな瀧をつくり、瀧壺をつくり、青い淵をつくつてゐた。それを前にして、柳の老木は明るい河原の上に影を落して居た。太く長い、夾竹桃に似た柳の葉は、日光にきらめいてさわやかに見えた。

案内は立ちどまつた。そして背中の荷物をおろしてしまつた。

『こゝで午飯にしよ。——何時ぢやろ。』

『十一時少し過ぎてゐる。……もう、さうなるだらうかな。』と紺セルの年上の青年は云つた。

大きな石は重なりながら柳の蔭に並んで居た。一行はその上へ腰をかけた。案内は荷物の中から風呂敷を出した。薄板に包んだ握飯は皆に分けられた。

私たちが握飯を食べ始めると、案内は網の中からめんつうを出した。それは小さな飯櫃ほどの大きさを持つて居た。

口を動かしながら私は小聲で谷君に言つた。

『何れくらゐはいるだらう？』

『さう、五合位ははいるね。』

案内は黙りきつて、頻りに口を動かしてゐた。それはまるで仕事をしてゐるやうであつた。私たちが済んでしまつた頃には、彼は川の水を汲んで来て飯にかけて流し込んで居た。

飯が済むと案内は、腰に下げてゐた山刀を持つて行つて、柳の若枝を半抱へばかりも切つて来た。それを河原の石の上へひろげたと見ると、ごろりと仰向きに寝てしまつた。眼を閉ぢると殆ど一緒に、子供らしい相を残してゐる彼の顔には、もう眠りに入つたやうな静かさがあつた。

谷君と私とは、著てゐた糸だてを並べて敷いて、その上に横になつた。他の人たちも彼方此方に寝轉んでゐた。

疲労と満腹とは、不思議な快さと變つて来て居た。地を傳つて頭に響いてゐる瀧の音は、そのくり返す同じ響を聞いてゐる中に、何時ともなく低いものに變つて来た。遠いものに變つて来た。ふとその響は、地の底からかすかに洩れて来るやうに

も聞えた……

『眠くなつた。』と谷君は呟いた。

眠りに引き入れられようとして、ちつと何か形のない物を見つめてゐるやうな気分にもなつてゐた。

通つて来た路は不思議に胸から消えてしまつて居た。此れから先の路も不思議に気が、りにならなかつた。後も先もなく、全く總ての關係から切り離されてゐるやうな、不思議な程深い安易な気分が私の體を包んで来た。

眠りはしないかと思つた谷君は、静かな調子で話しかけた。

『あの水の音が、かう、喜んでるやうにや聞えないかい君にや？』
『あ……』

私は曖昧な答をして、そして今更のやうに水の音に耳を向けた。とその音は俄に高くなつて来た。荒々しい、そして同時に柔かくかすかなその音は、しんとした中につと起つて、そして遠くく、糸のやうにかすかな音になつて行つた。その音は

暫くも絶えない。

喜んで。……さうだ、生れたものゝ喜んであげてる聲のやうにもある。

『さうだね、喜んでるね。』

『僕にや何だか、地の底へしみ込んで、消えて行くやうに聞えるよ……』

谷君の調子にはなつかしさうな、うるみを帯びた所があつた。

私は起き上つた。眼の前の流れはまた私の眼をさらへた。二つのまるとい岩に狭められた青い水は、豊かにふくらみあがるかど見ると、するりと岩を乗り越えて、先立つた水の眞つ白に沸きたつて泡となつてゐる中へ落ちる。と、その泡の末から青い水は現れて、やすらかに走り出す。静かな日光も空氣も、その瀧の上にはをどつてゐた。其所にある捉へ難い美しさは、何時までも眼を離させなかつた。

水の音はまた耳から遠いやうになつて行つた。

川の向う岸から俄かに高まつて、全體を青草に蔽はれた山があつた。眼でとめるど、その頂きが見えた。其所には二三本の白樺と思はれる木が、細くひよろくど

立つて居た。梢にだけ疎らに青い葉が附いて、そこにだけ日の光が鮮かにあたつてゐた。そしてその梢だけゆらくと静かにゆれてゐた。私の眼はその木から離れなくなつた。二三本のさみしい木は眼に一杯になつて来た。

私は起きて川岸へ行つた。手を浸すと水は冷たく肌にしみた。石を飛んで、流れの中の岩の上に立つた。

河原の石に轉がつてゐる一行は、聲も出さず身動きもしなくてゐるが、皆な眼を明いてゐるのを見出した。眠つてゐるのは案内者だけであつた。谷君も起き上つて川岸へ来た。

ふと私たちの眼の前へ、知らない人たちが現れた。それは私たちの来た河原を上つた来た人たちであつた。白地の浴衣に草鞋をはいたいけ、町から町をさまよつて歩く旅藝人のやうな無難作な風をしてゐた。三四人であつた。『今日は。』

『お先へ。』

後から来て、追ひ抜いて行く旅人の挨拶をして、その一行はすた／＼と水上の方へ隠れて行つた。

『出懸けようかね?』と私は言つた。

『あゝ。』と谷君は言つた。

案内者の寝てゐる側へ歸つて来ると、彼も眼をさました。起き上ると、眠さうに伸びをして、

『出懸けるかな。』と呟いた。

明るい、静かな、獸の隠れ家に似た場所を後にして、また一列をつくつて一行は歩き出した。

五

『今度は一番深い。はゝゝ。』

案内者は振り返つて私達を見た。脚もとを洗つて流れてゐる流れは、此れまでに較べると荒い瀬の音を立て、居た。

案内は渡り始めた。私たちは黙つてつゝいた。はげしい水勢に抵抗しつゝ踏む石は皆な圓かつた。水は次第に深く、膝の上を拂つた。水は腰にまでも及ぼうとした。

水が盡きると、慌て、振り返つて誰も皆な後につゞく者を氣づかはしうに見た。『もう無からうね?』戯談のやうに谷君は案内者に言つた。

『あゝ、もう無い。』と平氣な顔をして案内者は答へた。

河原は俄に狭くなつて來た。兩岸はまた岩の積み重ねのやうな山となつて來た。

日光は遠いものになつて、私たちの前後左右とも曇りを帯びた深い青となつた。水の縁は沈んで、白く碎けるのだけが光つて來た。

私たちは水の當つては碎ける高い岩の下から下をと歩いた。淺瀬の所には飛びくゞに石があつた。私たちはその上を踏みくゞした。

高く籠つて來た水音と、雫をこぼしつゝゐる岩の連続とは、奥のない岩屋の中を

歩いてゐるやうに感じさせた。

水を離れた。青草の中の細みちが私たちの前に續いて來た。釣鐘草に似た紫の花が、暗い木蔭があるときつと簇がつて咲いて居た。よわくゞとした日光が地にしみるやうにさしてゐる所があると、ともすると、小さな茶いろの羽をした蝶が群らがつて、低く、ひらくゞと、その一點の日光をめぐつて飛んで居た。

大木が倒れて路を横切つて居た。

前面にあたつて、やゝ廣く青い空があらはれて來た。と、ちらりと赤い岩山が、高く遠くつゞいてゐると思はれる一角を見せて來た。路は急な坂になつて、山から雨の爲に押し出されて來たと見える缺け石は、赤く長く續いて光つた。木の枝にとまつた鳥のやうに、大きな岩は落ちさうにして山の肌を附いてゐるのが見えた。と又路は青草に隠れた。

赤い肌をあらはした山は、一本の木も持たずに、俯向いて見るがやうな峻しさをもつて私たちの頭の上に峙つた。私たちはその裾を歩いて行くのであつた。一つの

大きな岩が、その山の一角がむしれて落ちて来たやうにして立つて居た。岩は内へ向つて斜めに削り取つたやうな形になつて居た。

案内者は其所に立ちどまつた。休むにはいゝ岩だと思つて、自然に屋根の形になつてゐる岩の肌を見上げた。その下には、十人、二十人の人が雨をしのげるやうに見えた。

其所には明らかに誰か休んだ跡が残つて居た。岩の下には薪の燃えさしがあつた。岩の肌の一部は煙にすゞけて居た。空き鐘が一面に棄てゝあつて、古草鞋はその間に腐つて居た。

『こゝが赤澤ぢやがね。』と言つて案内者は私たちを見た。

赤澤の小屋か坊主小屋かに泊るんだと、山の話の出た時にI君から聞いて居たのを思ひ出した。小屋といふのはこの岩蔭のことだらうか。

『こゝが小屋かい？』

『あゝ、さうぢや。』

私たちは今更のやうに岩蔭を見た。空き鐘、古草鞋など、たま／＼見かけた私たちの用品は、不思議に汚いものゝやうに感じられた。新聞紙の破れまでも汚かつた。この下で眠るのかと思ふと、岩は頭の上に重さうに見えた。見上げる赤肌の山も息苦しさうに見えた。

顔を見合つて私たちは黙つて居た。

『坊主までは行かれないのかい？』と私は案内者を見た。

『行かれんことは無いが、四人きりはいれんでね……。たき物も堰松はひまつぎりぢやからね。』

たき物とはにかく、それだと六人の中の二人は夜露にうたれなくてはならない譯だ。一行は黙つて、常惑の色を浮べて居た。

『外にや寝られる所が無いのかね？』

『無いことはないが。小屋がこはれてるかも知れんがね……。』
成るべくは行きたくない、といふ色が案内の顔に見えた。が、直ぐにそれは消えた。

『何時なんじだらう？』と、谷君は呟いて時計を見た。『まだ三時だよ。』

『今つから此所で寝支度する氣にもなれないね。』

『とにかく先へ行きませう！』黙つてゐた年上の紺セルは、引き取るやうにして強い調子で言つた。

一行の顔には明るい色が浮んだ。

『それぢや、行くんぢやね。』と案内者は、わだかまりのない顔をして言つた。

そして案内者は、岩の下の、奥まつた薄暗い方へはいつて行つた。出て來た時には、蜜柑箱を抱いて居た。彼は明るい方へ向けて其の蓋を取つた。

『誰か盗んで食うたな！』

案内者はいま／＼しさうに呟いた。箱の中にあるのは味噌であつた。彼は荷物の中から箱を出して、その味噌を小分けをして移した。何をするだらう……と思つて眺めてゐた私たちは、それが今夜の食料だと悟つた。

岩のあたりには、濃緑のまるい細かい葉をもつた丈の低い木が一面にあつた。そ

の葉を綴つて、黒い、よく見ると濃い紫の小さい實がなつてゐた。案内者はその實を取つては口へ入れた。

『それ、食べられるのかい？』と年上の紺セルは側へ寄つて行つた。

『これ、山梨やまなしぢや。』

『ほう、こいつはうまいや！』と一つ摘んで口に入れた青い葉は、皆に教へるやうに言つた。

私たちもそちらへ行つた。あまい、いくらかの酸みを帯びた實は、やはらかく舌に觸れて溶けた。私たちは摘んでは口へ入れ／＼した。

『上等だ。水を飲むよりかすつといふ。』一本の木の前へ立つてゐた谷君はつぶやいた。

山梨の木は限りなくあるやうに見えた。私と谷君とはこれからそれへと移つた。

私たちは山梨から眼を移した。岩の後ろは溪流になつてゐた。赤いろをした大きな岩は其所にかたまつて、あたりの青い中に鮮かに、奇怪に光つてゐた。その赤い

岩の中をくぐつて、水は白く碎けて居た。

『成る程、赤澤だね。』と谷君は感心したやうに言つた。

ちつと岩から落ちる水を眺めて居た谷君は、やがて、岩へ手をかけながら下りて行つた。水を飲まうとするのらしい。

それを見ると私もあとから下りて行つた。

河原は次第に廣くなつて來た。流れは次第に細くなつて來て、軽い聲を立てながらもうねりくした。河原の兩岸には、白樺と、柳と、名を知らない一二の木が低い林をつやけてゐた。山はやゝ遠い距離を保つて、三面を取り圍んで來た。

前面の山には、低く高く、ところ／＼眞つ白い所があつて、ちら／＼と光つた。『雪が見え出したよ。』と私は歩きながら谷君に云つた。盛夏に残つてゐる雪を踏むといふことは、東京に育つた谷君にはよほど不思議に感じられたと見えて、幾度も温泉宿で繰り返したことであつた。

『あゝ！』と頷きながら谷君は、ちつとそちらを見やつた。

案内者は立ちどまると見ると、河原にあぐらをかいて、背中の荷物を背負子しよひことしよに其所に下した。

『此所かい？』

『あゝ、此所ぢや。』

そこには、並んで生えてゐる白樺の立ち木を二本倒しかけて、その上へ白樺の枝を渡して、そして兩側にも白樺の枝を立てかけたものがあつた。それが小屋と呼んでゐるものであると知つた。

屋根の葉も壁の葉も、青い葉は皆な枯れて萎びてしまつて、枝ばかりになつて居た。小屋の入口には、たき火をした跡があつて、燃えさしの太い丸太が轉がつて居た。倒しかけた白樺の一本から繩を吊つて、その先へ、木の股をそのまゝ、鍵の代りにしたのが結び著けてあつた。

大きな鐵鍋が一つ、棄てたやうにして置いてあつた。汚い椀が三つ四つ轉がつて居た。

一行は著てゐた糸だてを取つて小屋の前の小石の上に敷いた。めい／＼其の上
腰を下して、濡れたまゝ乾かなくてゐる脚絆と草鞋をした足を投げ出した。
がっかりした色が重く皆の顔にあらはれて居た。
何を言ふものもなく、向つた方を眺めてゐた。

今夜かうした所に寝るといふことが、不思議なことのやうに感じられた。それは
此れまでの習慣からは餘りにもかけ離れた、一つの夢のやうにも感じられた。

小屋のうしろに續いた樹立の方で、鋸で木を挽く音が聞えて來た。案内者が今夜
の薪を用意してゐるのだらう。明るい中をしよう／＼といふ水の音にまじつて聞え
て來る静かな鋸の音は、妙にそは／＼した私の心持を落ち着かせて來た。

こゝに寝る一夜——それは分りにくい話の何時か漸く會得されたがやうに胸に捉
へられて來た。

私は濡れた草鞋と脚絆とを取つた。皆はもう何時か取つてしまつて居たのに心附
いた。

小屋の側に立つて、案内の木挽きをするのを見てゐたらしい谷君は、せはしく私
を呼んだ。

『こら、櫻花！——めづらしいね、八月、櫻花が咲いてるなんて。』

谷君の指の間には、うす紅の、さみしく咲いた山櫻の花の三つ四つが、そつと
大事なものを保つやうにして摘まゝれて居た。

私ものぞき込んだ。

『藏つとかうね。』と谷君は、隠しから手帳を出してその間に挟んだ。

私たちは皆な、所在のない時間をつぶさうとするやうに河原をうろついた。小石
に足裏をかまれる痛さから、皆な其所に棄て、あつた古草鞋を突っかけて居た。

鋸の音はやんで、山刀を使ふ音が起つてゐた。

河原のやゝ高い所には、草花がむらがつて咲いて居た。紅、紫、黄、白と、樹立
と石とのひろがりの單調な色の中にまじつてゐるのを見ると、眼を注がずにはあ
られなかつた。小さな、瘦せた、寂しい花は、ほのかな、純粹な色をして咲いてゐ

た。

それは手を伸すにもいた／＼しいやうであつた。

『これ持つて行かれないものか知ら？』

『駄目だらうね、かう咲いちまつて居ちや。』

——根だけならいゝかも知れないが。』

東京の花壇が胸に浮んだ。それは濁つた暗いものに思はれた。

連中はまた小屋の前へ歸つて来て居た。空は何時の間にか、うすい耀かがやきも失つて、冷たい青さを加へて来た。夜を想像するには餘りにも明るかつたのが、暫くの間、夜を思はせる色となつて来た。空氣もきは立つて冷たさを含んで来た。

『小屋へはいらうちや無いか。』

谷君は起つて、敷いてゐた糸だてを小屋の内へ移した。それは辛くも糸だてを二枚並べられる程の廣さであつた。子供のいたづらに拵へたやうに見えた小屋も不思議に尤もなものに見えて来た。狭苦しい、陰氣くさううに見えたものも、その内にはいつて、五人が押し／＼して膝を並べると、不思議な親しみが湧いて来た。

六

案内は小屋の前へ薪を運んで来た。それは可なりの太さのある白樺の生木で、六尺ばかりの長さに切つたものであつた。積んだ上に積み上げて、案内は三尺ばかりの高さにした。

これがたき木かと思つて私たちは眺めた。

『大きな木を二本切つちまつたよ。』と言つて谷君は笑つた。

案内は枯れ枝を集めて来てマツチで火を移した。その火は白樺の太い幹にまつはり附いて、音を立てつゝ火にして行つた。積み重ねた木は、真ん中から赤々と燃え上つた。

一行の者は眼も離さず燃え立つて行く火を眺めて居た。山は黒く、空は青ざめて、河原は白さを加へて来た。深い沈黙はその上を壓して、そして微風の戦たたかぎのやうに胸の底にさはつた。その中なかに燃え立つた小さなたき火は、不思議な程たのもし

いものに感じられた。

火は暖かく快かつた。

案内は荷物の中からズツクの袋を出した。其所にあつた鐵鍋へ、その袋から米を掴み出して入れた。鍋は流れの岸へ提げて行かれた。

鐵鍋は火の上を下つてゐる木の鍵にかけられた。

赤澤から持つて來た味噌を、荷物にくゝし附けてあつた小さな鍋へ移しながら案内は呟いた。

『……鍋持つてつちまやがつた。仕方の無え奴らだ。』

その鍋は、燃え落ちた火の上に置かれた。

『ちよつくら出て呉れましょ、工合を直すぞ。』

一行は小屋から出た。案内は屋根へ新たに白樺の枝を加へた。用意して來た油紙をひろげた。『此れ借りるぞ』と言つて一枚の糸だてを油紙に並べてかけた。兩側の壁にあたる所へも、枝を立て、風を防げるやうにした。最後には小屋の中の小石ま

じりの砂地を撫せ廻して平らにして、糸だてを敷き直した。

私たちが小屋へはいり直した時には、案内は小屋の外の、火に寄つた所にあぐらをかいて居た。

無口な、よく働く案内は親しめるといふよりは可愛いものに感じられて來た。山上の人によく見る、日にやけてはゐるが地の白い顔をして、子供に見るやうな無邪氣な明るい眼をして、鍋の上を見詰めてゐる案内の顔に私は眼をやつた。

『おい君は何て名だい？名前を知らないぞ工合が悪い。』

谷君はさう言つた。案内は鍋の上を見たまゝ、起ち上つて、鍵の工合を直しながら、

『わしかね。』と呟しさうな顔をして、『中島作次郎つていふぞ。』

『作さんだね。』と年上の紺セルはいつた。

『あゝ。』と言つて作さんは笑つた。

『感心に働くね。——何所だい、家は？』

作さんはちらりと極り悪るさうな色を見せた。

「島々かい？」

「……飛騨ぢや！」といふ作さんの聲には、思ひ切つていふらしい調子があつた。

「仲尾つて、上高地から三里ばかりの所ぢや。」

「ぢや、夏だけあすこへ来るんだね。」

「あゝ。冬はちつとばかりが獵と、山としてるだ。」

「あゝ。」と作さんの顔は輝いた。

「何が獲れる？」

「いろ／＼取れる。」

「賣りに行くのかい？」

「うゝん、何ぼでも買ひに来る。据わつとつて賣れる。」

作さんは威張つた調子でいつた。——鍋の湯が煮えこぼれ出した。作さんは慌て、自分の辨當箱のめんつうに汲んで来てあつた水を鍋の中へさした。

作さんは味噌汁の質に、持つて来た氷豆腐を小さくこはし出した。

「あ、鯉節を持つて来てあつた。」と谷君はいつた。

「搔いて入れようね。」

作さんは荷物の中から風呂敷包を出して渡した。谷君は受取つて、ナイフを出して搔き始めた。

「作さん山刀を貸さないか。」

腰のまはりから作さんは山刀を取つて渡した。谷君は珍しさうにひねくつて見た。光つた山刀の刃に觸れて、鯉節はする／＼と搔けた。

「もう澤山でせう。」と年上の紺セルは、次第にたまつて来る鯉節を見ていつた。飯も汁も出来た。

「汁をかけて食べて貰ふだ。」

作さんは椀を一つづつ渡した。それは小屋の前に轉がつてゐたものである。椀は足りなかつた。と、自分の辨當箱の面桶を渡しながら、

『……洗つてあるでね。』といった。

鍋の飯は椀に盛られた。私たちの前にある味噌汁の鍋へは、匙の代りに空き罐が入れられた。

汁かけ飯の熱いのをふう／＼と吹きながら皆な食べた。

『うまい／＼！』

『全く素敵だ！』

箸を動かしながら口々にいつた。それは曾て味つたことが無いと思はれるまでの美味であつた。

『東京でこれが食べられるとね。』谷君はさう言つた。

『全くですね。』と年上の紺セルは答へた。

満腹の後に感じる満足の顔を、濃い色となつて來たたき火は照し出した。

鍋の飯は半分ぐらゐも残つて居た。作さんの飯の濟んだ時には、鍋は黒く底をあらはして居た。

會話は始められて居た。年上の紺セルは、聞かれるまゝに東京の住所を聞せた。

この旅行の話をした。先づ白根へ登つた。つゞいて淺間へ登つた。淺間は不意の爆發があるので禁じられてゐるのを隠れて登つたのであつた。此所の山を濟んだら飛驒から乗鞍へ登つて、最後に富士へと思つてゐるとのことであつた。

『大規模ですね。』と谷君はいつた。

『年々してゐます。山の面白みつてのは、して見ない者にや分りませんからね。先生方、私にいはせると食はず嫌ひですよ。』

その言葉には誰かに向つて反抗するやうな所があつた。

『あちらは？』と谷君は、金剛杖を持つて黙つて跡から附いて來てばかりゐた青年の上を聞いた。

『あちらは農科大學の水産科の方で——』紺セルはさう言つて紹介したが、それ以上は知らない、といふやうであつた。

『僕も、年々山へは登つてます。』と農科大學は落ちついた、上品な調子で話し出し

た。
『今年は木曾の御嶽みづたけだけと思ひましたが、急に此所へ來たくなつて、松本から引き返してはいつて來ました。』

『皆さん中々盛んですね。』と谷君は眼をかゝやかした。

『大きな荷物は何です？』私は案内に持たせずに背負つてゐる雜囊を不審に思つて聞いた。

『寫真機です。』

『水産と山とは、離れ過ぎてゐるやうな氣がするが、何が關係があるんですかね。』何か研究的の意味があるのかと思つて私は聞いた。青年は笑顔になつた。

『水産つてましても、僕のは細菌の方ですから、海にも山にも關係が無いんです。道樂ですよ。』

『湯をあがるかね？』と作さんは聞いた。

飯を食べたあとのからになつた鍋は鍵にかけられるたが、それが今下されてあつ

た。
『欲しいね。』と私はいつた。

薄いおも湯は飯の椀に汲んで出された。

『此れを入れるといふだらう。』と谷君は、福神漬の汁だけ残つた罐を出した。

『僕も貰はう。』

『僕も。』

年上の紺セルは、何か思ひ出したやうに笑顔を作つて、作さんを見た。

『作さん、島々の錢湯の裏の茶屋ね、……知つてゐるだらう？』

『へ、へ、』と笑ひ出した作さんの顔は、湧き上つて來る嬉しさにくづれるやうに見えた。顔も眼もかゝやいて來た。『へ、へ、へ、えらい所を知つてゐるね……』

『は、は、』と紺セルも笑つた。

『行くのかい？』

『へ、へ、』と作さんはたゞ笑つてゐる。

測り難い深い歡びとあこがれを作さんの顔は語つて居た。不思議なものを見るやうに私と谷君とは見て居た。

『その土地々々の遊び場所を見るのは、ためになるもんですよ。』

青年は眞顔にかへつてさういつた。その家のあるのは錢湯の中で老人から聞いた。酒肴の代が驚かれる程やすかつた。若い女が二人居たが、言葉がよく通じなかつたといふことを話した。

『おれも入れてもらふかな。』

作さんはさう言つて、小屋の中へもぐり込んだ。そして側の方へ、背中へ著てゐたくら猪の皮を脱いで敷いて、その上へ仰向けに寝た。

話が絶えると、深い沈黙は填めるべき低地を得た水のやうに私たちの上を蔽つた。それは壓へつけられるやうな重いものであつた。ともう、話の糸口は一つも無いやうな氣がされた。

暫くすると皆、ごろ／＼と糸だての上へ寝てしまつて居た。

七

薄い糸だてをどほして、河原の石ころは背にさはつた。寝がへりをするに脇腹にさはつた。ひや／＼と、大地が持つ冷たさは肌に傳はつて来る……。

枕には、案内の背負つて来た草鞋をしてゐた。それが頭にいたい。

足の方ではち／＼と火の燃える音がしてゐる。足だけがぼか／＼と暖くなつて来た。

疲労は柔かく重く體を浸して来た。

ごろ／＼と眠つた、と思ふと何物にか驚かされたやうに眼が覺めた。

頭は暗くなつてゐた……。

體温では大地は暖まらない。ふつとそんなことを思つて居た。ごろ／＼と大地の上には轉がつてゐる人たち、枝で圍つた小屋、暖氣を取るといふよりも野獸の來るのを防ぐ爲のたき火、夜に入つた一萬尺に近い山の上。閉ぢた眼の上にはさうしたもの

がもや／＼と、自身のことのやうな、他人のことのやうな不分明をもつて續いて來た……。原始の人の、我々の祖先の經驗を繰り返してゐるんだ……。といふ心持が、一度思つたことを思ひ返すやうなたやすさをもつて胸を過ぎて行つた……。

うつら／＼として居た。

はつきりと眼が覺めた。まるくなつて寝てゐた私の背中の方に、谷君は抱きつくやうにしてゐた。私は又年上の紺セルの毛布の中へもぐり込まうとしてゐた。

頭を上げた。たき火は大分燃え下つて居た。寒さは背を走つた。

河原を越して前面に峙立つてゐた山と山とは、たゞ眞つ黒に見えた。青黒い空は、山を離れて高くつゞいてゐた。そこには月があつた。形の缺けた、光の弱い月は、一つの奇怪なものやうに見えてあらはれてゐた。その月をぼんやりと眺めてゐると、冷い、はかり難い、我々とは何の關係もない大きな物が、それを入口にして遠く何所までも續いてゐるのが感じられた。紺セルの青年がひつくりと起き上つた。

「火が燃え下つた。」と言つて青年は起つて行つて、薪の位置を直した。

「何時でせうね？夜が明けさうなものだが……。」

青年は時計を見た。

「まだ八時ですよ。」

「さうですかね」

二人はまた寝た。

毛布の肩を直した。谷君と二人で一枚の毛布を着てゐるので肩がすいて背中が出さうになつてゐた。體の痛さと冷たさにまじつて、火の新たにぼち／＼といふ音、しよろ／＼といふ水音、頭の上の枯れ葉のそよぐ音が耳を刺した。

うつ／＼してゐる目に、誰かゝ起きて火を直してゐるのが見えた。

「十時——」

と言つた言葉だけが聞えて、またしんどなつた。

何時か眠つて居た。眼が覺めて起き直つた時には、空は陰鬱な色にかたまつては

居たが、何所かに柔かみが流れて居た。

月は無くなつてゐた。

ひく／＼と皆な起き上つた。

作さんは薪を直した。火は新たに力を得て燃え上つた。

「眠つたんだね……。」

眠つたといふことが、あるまじきことぞしたやうにも思へた。

「君の背中へかじりついたんで、やう／＼眠れたよ。」と谷君はいつた。

黙つてゐた農科大学は、

「僕起きて火を直した時には、十二時でした。」といつた。

誰もそれは知らなかつた。

作さんは朝飯の支度にかゝつた。河原に屈んで米を洗つてゐる作さんの後姿は、妙に寂しいものに見えた。燃えさがり、燃えさがりして、もう盡きさうになつてゐるたき火も寂しく見えた。うす闇に包まれてゐる私たちお互の顔も、青く寂しく見

えた。

弾力のない心で、ちつと空の明けてゆくのを待つて居た。沈黙はつゞいて居た。

時間は移らなかつた。時間は移つたが空は明けて来ない。

明るくなつて行くと見えた空は、急に前よりも暗くなつて来た。冷氣はその中からあらはれて来た。

今にも盡きてしまひさうな薪の燃えるのを、眼を離すことの出来ないものゝやうに皆で見詰めて居た。

しらく／＼と急に空が明るくなつて来た。

八

一行は昨日のやうに一列を作つて歩き出した。河原の石は踏んで行く足の前に動いてゐるやうに見えた。

夜は明け離れてゐた。河原が盡きると、其所か、せつてん雪田が始まつて居た。

私たちは其所に立ちどまつてしまつた。

河原を挟んで峙立ちつゝ續いてゐた二つの山脈は、今私たちの前面に俄に起つて來た山に結び附けられて一つとなつてしまつた。二つの山脈の作る谿谷は、一つの山の腹となつた。そして其所は一面に、眞つ白な雪に埋められてゐるのであつた。河原と、河原を流れてゐた青い流れとを呑んで、眞つ白な、丁度河原のやうな形をした雪田は、可なりな傾斜をもつてうね／＼と山を這ひ上つてゐるのであつた。

雪田は明るい晝の光にちらちらと煌いた。兩方の山は、山といふよりは、赤黒い一つの岩石のつゞきとなつた。そちらも、絶壁になつた所、割け目になつた所は、眞つ白な雪であつて、きらきらと一層あざやかに輝いてゐた。奇怪な形をした、亂れ立つてゐる赤黒い岩石と、純白なきらめきわたる雪。雪と岩石との間には、白樺の樹立が縁のやうに續いてはゐたが、それは水に洗はれた後の川岸の草のやうに、にぶい薄青さを保つてゐるばかり、そして眞つ直に立つことが出來ずに、低く、一様に山裾に向つて倒れてゐた。

青空は水に似て、力なく山の彼方にひろがつて居た。

静かであつた河原に立つて、新たにひらけて來たその光景を見上げると、私たちはまるで、晴れた空を襲つて來た夕立雲を見るやうに、面てを打たれたやうに感じた。其所を占めてゐる荒涼の氣は、その中にはいつて行くものをたゞは歸すまい、といふ氣がした。見上げてゐると、見る／＼何らかの變化が起つて來るがやうにも思はれた。

案内は雪田の上を登り出した。荷物を小屋に置いて來た案内は、背中に著た、幅の廣いくら猪の皮を見せて、のそり、のそりと雪を踏みしめて進んだ。

私たちも一列となつて隨つた。寂しくついてゐる案内の草鞋の跡を踏んで、足もどを見つゝ歩みを移した。雪は上つただけ融けかゝつて濕つてゐた。固くはあるが、迂る程ではなかつた。その上には尖つた石ころが、撒き散らしたやうに雪に埋められて居た。それは暴風の爲に山頂から吹き落されたものに見えた。

前後に左右に擴がつてゐる雪は、寒氣を吐いて居た。足裏に力を籠めて一歩一歩

と移して行く登りでありながら、肌には寒さを感じて来た。草鞋と甲掛とをどほして、上解けした雪の水はしみた。杖を握った手先も冷くなつて来た。

雪田の真ん中に、一つの大きな岩が突つ立つて居た。息がはづんで来た一行はそこへ立ちどまつた。岩の周囲だけ雪は融けてゐた。そのすき間から、雪の下に隠れた岩の肌が瞰下された。しよろ／＼、しよろ／＼と、雪の下の真つ闇な中から水の音が聞えて来た。ぼち／＼と、雪の融けた雫がその暗闇へ落ちて居た。

振り返ると、登つて来た雪田は、遠く急な勾配をもつて走つてゐた。草鞋の跡はかすかにみとめられた。見上げると上は、次第に急な勾配をもつて、雪田は煌きつゝ這ひ上つてゐた。

勾配が急になると、雪はかたくなつた。踏みしめた足はずる／＼と這つた。深い割け目を越さうとして跨ぐと、足の下薄くなつてゐた氷は、高い音を立て、割れた。

雪田と雪田の間に挟まつて、岩石の高まりがあつた。其所にはうすい緑をした草

が、低く、岩にしがみ附くやうにして生えて居た。そしてその草は皆な花を持つてゐた。

岩から直ぐに咲いたやうに、ほのかな桃色をした花がむらがつて居た。石楠花に似てゐた。

農科大学は立ちどまつて花を摘んでゐた。

『何て花でせうね?』

『深山石楠花といふんでせう。』

摘まうとして手をやると、何となくさばることの出来ないものゝやうな気がした。その清らかさは、この深い雪の中に、かうして咲き出るまでの、隠れて費した力の程を思はせた。

手帳の中に深山石楠花を押した。と、その側に、アネモネに似た形をして咲いてゐる花が眼についた。

『此れは何でせう?』

『長之助草といふんです。長之助つて男が初めて見附けたとかいふんです。』
『この花は松本の平にもありますよ。あの邊ではちごくつてますがね。——色が少し違ふ。』

それも摘んだ。

一行は歩き出して居た。雪田の上へ、ぼち／＼と小さく黒く立つてゐる三四人の人の後姿、それは寂しい極みのものに見えた。

追いつかうとするど、足がすべる、息も直ぐに喘んで來た。

麥藁帽子が一つ、ころころと足もとへ轉がつて來た。風に吹き落されて來たのであつた。私はそれを拾つた。そして誰のだらうと見上げた。

一行は、直ぐ上の所に立ちどまつてゐた。その側に一行以外の人が三四人立つてゐた。その中の一人は、手に大きな鍋を提げてゐた。案内者はその青年をつかまへて何かいつてゐるらしい。帽子のない青年の髪の毛は風に吹き拂はれて、その顔は蒼ざめてゐた。帽子はその青年の物らしい。

私は追ひついて一行と一緒になつた。

案内者は怒つた口調で言ひ續けてゐた。

『使ふのもいいが、持つて行つちまつちや困るぢや。——あてにして來るんぢやからね。』

『だから、かうして持つて來たんです。』

さういふ青年の聲はかすれて聞えた。近寄つて見ると誰の顔も土け色になつて、唇は全く紫になつてゐた。白地の浴衣は風に吹きあふられて、脚絆も附けてゐない足は、細くひよろひよろとしてゐた。

連中は怪えた容子をありありと見せて、次第に後退りになつた。

『もとの所へ返して置くんぢやせ!』

案内者が壓へつけるやうにいふと、鍋を提げて最後まで踏みとゞまつてゐた青年も一行に背を向けた。

行きちがふ時に私は帽子を渡した。青年は黙つて、挨拶をするのも忘れたやうに

それを受取つて、すたすたと下りて行つた。

『ありや昨日僕等を追ひ越して行つた連中ぢやないか？』

さう言ふと案内は頷いた。そして、

『亂暴な連中ぢや、ああいふ連中が間違をしでかすんぢや。』と氣になるやうな口調で罵つた。

雪田を越してからもう大分登つて來た氣がした。傾斜も次第に峻しくなつて來て、そして足もとは丁度河原のやうに、大きな角石の積りとなつて來た。

『頂上はまだ見えないかね？』私は並んで歩いてゐる案内者に聞いた。

『あれが頂上ぢや。』案内者は頭の上を指さした。

頂上と聞くと一行は一時に聲を擧げた。

『あれか！』

『ほう！』

私たちは足をどよめて見上げた。土に蔽はれて來た山は、今は黒い岩と、その上

に生えた青黒く低い偃松とだけになつて、仰向いて見上げるやうに俄に峻しくなつてゐる。その上に、丁度槍の穂先のやうな一つの岩が、一面に茶いろにかがやきつゝ、深く刻み附いた襞を濃い茶ににじませつゝ、其の裾に、小さい缺口石の積み重ねを流し出しつゝ、頭上にひらけて來た青空を背にして立ちあがつて居るのである。

左手に見て來た岩山は、今は弓なりになつて、前にあらはれて來てゐた。それは丁度頭をもたげた鷲の、一方の翼のやうになつた。茶いろであつた一つの岩は黒く變つて、幾つかの岩にわかれた。その岩の間にある雪は、眞つ白にきらきらと光りながら眼と水平につゞいて來た。

右手には黒く張つた翼を越えて、赤黒く光つた山がその頂をあらはして來た。

雪田を登つて來しなに初めて逢つた風は、俄に荒いものとなつて來た。仰向いて見てゐる帽子の廂に吹きつける風は、願の下でどめた紐を締めつけて、そして帽子を背中へ吹き落した。吹きつゝのつて來る風の中に突つ立つてゐる絶頂は、ばつと明

るい茶色にかやくやうにも見えた。くづれ落ちはしないかとも見えた。一跨ぎに行かれる程の近い所のやうにも見えた。

『お、富士！』

さういふ聲に振り返つた。仰いで見てゐた山はすべて眼の下に沈んでしまつてゐた。私たちの眼は、海の上を見渡すやうに、たい青いものを見るばかりであつた。その青いもの、中にやゝ遠く、富士はその頂を眼に眞つ青な空にあらはしゐる。その左にも、右にも、同じ程の大きさの山が、うす青い中にさみしく頭を並べてゐる。『さ、もう一と息だ！』年上の紺セルは、立ちどまつてゐるのがもどかしいやうにいつた。『作さん、彼所へ出りやいゝんだらう？』

それは絶頂の岩と左手の翼との間に、少しばかり岩の低くなつてゐる所であつた。『あゝ。——あれが槍の肩ぢや。』と作さんはいつた。

青年は、同行の年下の紺セルと二人で先へ出懸けようとして、手を懸けて飛ぶのを押へてゐた帽子を脱いで案内に渡した。『此れ預けるよ。』

二人の出懸けた後から、私たちは案内を先へ立て、歩き出した。

それは一步一步、足を踏む所を見定めてから、やう／＼踏み懸けるやうな峻しい岩の上であつた。そこにも、黄や白の花が丈低く、地にしがみついて咲いてゐた。息は直ぐに喘んで來た。が風に吹かれて手はかじかんで來た。頬は痛かつた。

別れて行つた二人の青年の後姿は、思はない方に見えた。ねらひを附けてある筈の絶頂の脇の肩から、次第次第に左の方へ逸れて行つてしまつた。二人は今、左手の翼の下に、しろ／＼と光つてゐる雪田の上に、小さく黒く、虫のやうになつて動いて居た。と、離れ離れになつて、水を泳ぐやうな形に見えた。

今、眼に映つて來る二人の姿は、丁度大きな渦卷の上をめぐつてゐる青い木の葉のやうに見えた。其所にさうしたものゝあるといふことが不思議のやうにも見えた。：一人は雪田の縁に据わり込んでしまつた。

『何所に行くつもりぢやらう？』と案内は頷いた。そして大聲をあげて、
『おうい！』

と呼んだ。風はその聲を短く消した。二人には聞えなかつたらしい。二人と同じ状態にゐる私たちが感じられて来た。緊張した心持は、直ぐにその感じを消した。

頭の上に見上げた絶頂は、歩いてても歩いてても同じ距離を保つてゐた。風は益々荒くなつて来た。

九

槍ヶ岳の肩の上へ出た。

『えらい風ぢや、こんな風は滅多ない！』

案内の作さんは肩の上へ立つと同時に逃げるやうに下りて来て、其所にある岩の一つの蔭へ體かたをかくした。

谷君と私はつゞいて肩の上へ立つた。ばつと顔を打たれたやうに感じた。體は後へ突かれたやうであつた。私たちは慌て、その側にある大きな岩の蔭へ隠れた。

それは烈風であつた。風は今、眼に見える或る物のやうに、寂しい音を立てつゝ、槍ヶ岳の絶頂をなしてゐる『槍の穂』と呼ばれてゐる岩を押し包んで吹いてゐるのであつた。岩かげに立つた私は、直ぐ眼の前から峙立つてゐる穂先を見上げた。高さは前面から仰いで見上げた時よりは低くて、十丈ばかりであつた。それは圓錐形をした、赤茶けた唯一つの岩石であつた。空は曇りながら高く、穂はごろりと轉がり出したやうであつた。そして、その面を掠めて吹く風の爲に、光りつかけりつして居た。殆ど直立したやうな峻しさではあるが、巖もある、でこぼこもある。縫りついて、無理に攀ちたならば登れるに相違ない。皆が登るんなら登らう。だが、この風で登れるのか知ら……と思つた。

岩かげから顔げけ出して、私は肩の彼方を見た。と私は強く瞬きをした。

それは顔を打つ風の痛さからでは無かつた。私の眼は初めて、此方の肩と肩を並べて、僅かの間隔を置いて今一つの山があつて、それとこれとの拵へてゐる深い谷を見たが爲であつた。それよりも彼方の山の此方に向けてゐる肌を見たが爲であつた。

山といふよりも其方は一ツトきの岩であつた。壁のやうに立つた岩であつた。そしてその肌は、殆ど全部焦茶の色をしてゐた。暗い谷を前にして立つてゐる其の岩の肌は、水に濡れたやうにつや／＼と光つて、何かの書に見た、惨殺された人の血にまみれた肋骨を思ひ出させた。

谷は、その底を見せなかつた。眞つ白な雲は今、その谷からもくもくと動きながら、その肌を隠しながら騰つて来る所であつた。

焦茶色をしたの山を越して、紫をふくんだ紺の山は、風ぎた海を見渡すやうにあらはれてゐた。青い空が其の彼方に遠く小さく見えた。

それは暫くの間であつた。私はまた岩の蔭へ隠れた。眼を刺した風は體中に痛さを覚えさせる寒風となつた。

胸を抱いてかたくなつてゐた私の體は、何時か胸ぶるひの出てるのを自身に感じた。

ちつとしてはゐられないで、私は岩蔭を離れた。案内は地に平みついて寝てゐた

私はその側へ行つてしやがんだ。

肩の左手の、黒く、奇怪な形をして蹲つてゐる岩の上に、前に別れた二人の青年の姿がちらりと見えて隠れた。

『おうい！』といふ聲が風の唸りの中に聞えた。

何所にゐるかも忘れて居た谷君の姿が、その岩の蔭からひよいと現れた。そして斜めに此方に、片手を土に突き／＼して走つて来た。

農科大學は、一つの岩の蔭に蹲つてゐた。

『たき火をしようと思つたが何うしても附かない。ひどい風だ。』

谷君は息を吐きながらいつた。顔は寒さに青ざめて居た。

『連中は？』

谷君は振り返つた。二人も岩の肌を這ひながら下りて来る所であつた。

眼の前の槍の穂を白く隠して、雲は風と共に狂ひつゝ、飛んで居た。私たちの眼は其方に囚へられた。それは丁度、岩を乗り越して流れる川の水のやうに、彼方の谷

から渦巻き上り、槍の穂を越して、此方の山腹へと渦巻き落ちた。

忽ちの中に此方の谷は眞白になつた。

また、忽ちの中にその雲は何所へか消えてしまつた。からりと晴れると、空の青が遠くつゞく。

幾らの違ひも無いと見ええた富士は、此方の高くなると共に際やかに高くなつて、眞つ直に又眼に入つた。その右に、左に、幾つかの山が、横に一線を描いて、うす青い空に濃い青々寂しく柔かに浮べてゐた。

寂しく浮び出した山から一段低く、限りなく重なつた山脈は、その頂上を貫く線を、丁度畑の畦を見るやうに平行に並べて、次第に近く、眼の下にまで及ぼしてゐた。仰いで見た赤澤は一つの赤い岩と變り、名のある常念嶽は、赤くかゞやきつゝ、その頂上の一線を、手を伸ばせば撫せられるやうに見せた。

「あの、富士の右の山は何だい？」
年上の紺セルは案内に聞いた。

「よくは知らんが、八ヶ岳ぢやろ。」

「ずつと離れて、ぼつちり見えるのは？」

「ありや駒ヶ岳の木曾駒と甲斐駒ぢや。」

「左の方の、あの大きいのは？」

「ありや赤石、——それから蓼科とかいふんぢや。」

「その此方は淺間山だらう。——割合に大きいな。」

さう言つた青年の聲は嬉しさうであつた。その頂に登つて來た記憶を思ひ出したやうに。

風の唸りを聞きながら、體をかたくして皆な遠く眼を放つて居た。

あの山の間の何所に人間が住んでるのだらう。さうした思ひが私の胸に力強く起つた。思へば其所には幾つもの平野がある譯だ。あの平野、この平野。あの町、この町。私の胸には一つの立派な建築物が浮んだ。其所へ出入りしてゐる或る日の或る時刻の人たちが浮んだ。と、それを糸口にして、記憶にあつた町と人とは、する

くど軽くついでた……。

ぼつとそれ等の物は消えてしまつた。畑の畦に似て山脈と山脈の頂上の線は又眼に満ちて来た。

夢を思ひ出さうとするやうな力のない心で、私は消えて行つたものを思つて居た。あはれみに似た心は、細く、しかし鋭く、ちつと胸におどんで居た。その心持は何時か自身に向つて来た……。

峻しい山の岩の上に、ぼつちりとして腰を掛けてゐる自身。同じやうにしてゐる仲間の者。何か後ろから軽く背を突いたとしたらば……。今一層の烈風が起つて来たならば……。一つの岩が上から轉がつて来たならば……。

頂上を目がけて一步一步登つて来た時、何の怖れをも感じなかつたのが不思議に見えて来た。今も、何事も起らないと心の底にはきめて居る。それが不思議に思へて来た……。

谷は濛々と又白くなつて来た。槍の穂は雲の中に赤くかゞやいて見えた。

寒さに體は痛くなつた。感覺の鈍つて行くのが感じられた。

青ざめた顔をして、一行は岩の蔭にすり寄つてゐた。誰も何も言はない。

足もとには、黄や白の花が咲いてゐた。

『お！』年上の紺セルは思はずあげるやうに高い聲を上げた。『浅間山の噴煙！』

一行は起き上つて其方を見た。浅間山の上にはいま、一團の黒雲のやうなものがあらはれて居た。うす青い空に、その黒煙は次第に擴がつた。

農科大學生は、背中の雜囊を開いた。中からは寫真機が取り出された。レンズは浅間山に向けられた。

『い、所を見ましたね。』と紺セルは眼を据ゑて居た。

富士の裾の方は、何時か雲と變つてゐた。

日光は明るく照つてゐた。彼方の山の上に、何の鳥か一羽、聞いたことのない音をして朗らかに啼いてゐるのが聞えた。

風の風ぐのを待つてと皆な思つてゐた。風は風きさうにも無い。そして思ひ寄らなかつた寒氣は體を凍えさせようとして來た。

私は體の痛いのに堪へられなくなつて來た。

『作さん、とても登れないかい？』

『駄目ぢや、登りや吹き飛ばされちまふ。』案内は平氣な調子で言つた。

『山は穩かな日つて、無いもんぢやでね。』

『諦めて下りませうかね。』寫眞を映してしまふと足もこの高山植物を摘んでゐた農科大學生は、私がさう言ふとおどなく頷いた。

『残念だな、折角此所まで來て。』年上の紺セルは槍の穂を見上げた。

『下りよう。寒くてたまたら無い。』と谷君もいつた。

一行は起つた。それでもと思つて見上げた槍の穂には、風は一層の強さをもつて

唸つてゐた。

槍の穂に背を向けて、私たちは下り始めた。紺セルの二人は列を離れて、岩に縱りつゝ、駈けるやうにして先へ走つた。(二九、一〇)

燒
岳
登
山
記

脚絆を着けて、糸だてを手に持つて、舅と私とは二階から下りた。土間には、それかと思はれる人がもう草鞋を穿いて待つてゐるらしくしてゐた。

麻の詰襟に黒い縞の半ズボンを穿いて、烏打帽を阿彌陀にかぶつて居た。顔も、體も細くて、色つやの悪い、眼じりの垂れた眼と、鼻の下の髭の伸び過ぎたのが、妙に親しみを感じさせる人であつた。三十位に見える。測候所の出張所員と聞いて地方の小官吏に見かける、取り澄した、厭味な人を想像してゐた私は、むしろ意外に感じた。

送り出して来てくれたI君は、私たちをその人に紹介した。

『この方たちです。お願ひします。』

出張員は笑顔を私たちに向けて、黙つて帽子へ手をかけた。

草鞋を穿いてしまふと、宿の主人は私たちに『水筒は?』と聞いた。

『持つてませんがね。』

『では瓶を。——水がありませんから。』

辨當とサイダーの瓶二本を主人は持ち出して来て渡した。その次手に出張員

に、『山刀は？』と聞いた。出張員が黙つてゐると、『まあ持つてお出でなさんし。』と言つて、柱に懸けてあつた山刀を取つて渡した。出張員は、腰に附けてゐた麻繩の側へそれを吊つた。

出懸けようとして出張員は小戻りした。

『頼むよ、寒暖計。——いゝかい？』

『大丈夫！』

と主人は頷いて見せた。

私たちは家を離れた。

白樺の林の中の路は明るく續いた。林を距て、静かな瀬の音が聞えて居た。木小屋があつた。くら猪の皮を背中に著た男がぼんやりとその前に立つてゐた。小屋の

前の立ち木の枝から、風鈴に似た音が聞えて来た。それはビール瓶の底をぬいて、その中に小石を吊したものであつた。雨に押し出されて来たやうに、火山灰がしろくど木蔭についた。牛の糞の乾いたのが見えた。

白樺の幹を削つて、黒く字の書いてあるのが見えた。『左、白骨道。右、蒲田道』と書いてあつた。

私たちは右へ折れた。路は直ぐに上りにかゝつた。瀬の音は次第に遠く、やがて全く消えて行つた。

早過ぎた出張員の歩調はゆるくなつた来た。

『焼岳へは何遍も入らつしやいますか？』と舅は聞いた。

『さうですね、七遍ばかり行きました。——噴火口が變つて、古いの、脇へ新しいのが出来たつてことですから、今日はそれを見たいと思ひます。うまく裏山へ廻れるといゝんですが、何うですか？』

『淺間山の噴煙が盛んになると、此方は弱るつて話ですが、本當ですか？』

『さういふことをいひますな。』と曖昧に言つて出張員は笑顔をつくつた。それは専門家の談話として新聞に出てゐたことであつた。断定したことをいはない出張員の笑顔に、その道の人の心持が窺はれた。

『不思議なものだね。』と舅は、出張員の答だけでは満足しないらしく私の方を見た。『えゝ。……ですが地球つて上からいつたら、淺間山と此所なんか、ほんのお隣りでせうからね。』

『それもさうだ。』

縦の木、柵の木など、濃緑の針葉樹しんえつじゆは木蔭を暗くして來た。黒く太い幹は、山の腹に沿つて遠く續いた。をり／＼まじつてゐる白樺の幹は眞つ白に見えた。路を挟んで、木下にはずつと熊笹がつゞいて來た。

路は險しかつた。圓い石ころがごろ／＼と轉つて居た。それは路といふよりは、雨水の流れ下る川になつてゐるらしかつた。

どんとんといふ音が遠く聞えて來た。斧の音であつた。老木の、倒れたままに朽

ちて行くのを見て來た私には、その音はめづらしく、懐かしく、寂しく聞えた。

眼の前に白木の積み重ねがあらはれた。屋根板にはぐものゝやうに見えた。

『何うするんでせうね、この木を？』

と私は立ち止つた。

『川へ流して出すんですがね——』といつて、舅は木の質を見ようとするやうにちつと見入つてゐた。出張員は、

『いたんだ木の拂下があつたんです。』と教へた。

白木と離れると、俄に深山の感じが漂つて來た。

路の側に、四つ手網に似た形をした、底を丸太で組んだものが置いてあつた。

『何でせうね？』

『これは兎おとしだ。この繩へ小便をかけて置くと、兎が來て噛むといふ仕かけになつてゐるさうだ。』

『小便を。』

男はうなづいた。

其所には、狭い路の上へ日光がこぼれたやうにさして居た。明るい地をめぐつてひら／＼と、小さな茶いろの蝶が飛んでゐた。それは高くも遠くも飛ばなかつた。朽葉の色に似た蝶は、見てゐると寂しく見えた。

濃緑の針葉樹の裏葉と、熊笹とは、又私たちの眼をとらへた。

『風がちつとも無いんですね。』

扇子をはた／＼と使ひながら、私は後から聲をかけた。陰鬱な、隧道ごんねろの中でも歩いてゐるやうな路を早く歩いてしまひたい。歩いたらいゝ所へ出るだらう……と思ひながらも、私は流れ出す汗の氣持悪るさに惱んだ。

『一ぶくつけませうか？』

先へ立つてゐた出張員は振り返つて言つた。

私たちは路の上へあぐらをかいた。

出張員は、兩切りの巻煙草を出して、短くつまみ切つて長い木製のパイプに挿んだ。

煙草の煙は白くふは／＼と眼にうつつた。鳥の聲も聞えては來ない。

『あなたの測候所には、私に又知りの人がゐましたがね。』

出張員の顔を見ながら私はさう言つた。出張員は私の顔を見返した。が、さう言れた爲に何の心も動してはゐないらしかつた。

『何どいつたか名前を胸忘れしましたが……。安曇あづみの人で、村は確か——』

『××君ですか？』

『さうでした。××つてました。——今も入らつしやいますか？』

『あの君は村へ歸つて、今は役場です。』

『さうですが。——あなたはお宅は？』

『××です。』

『××？それぢや餘り遠くもない。』

さう言つて私は舅を紹介した。

『あ、さうですか。それだとお目に懸つてるも知れませんでした。』
舅は私を紹介した。

『さうですか。——私はお村の××つて君の家へ行つて厄介になつて来たことがありました。』

『あの家なら直ぐ側です。』

『……いや、何うも——』

出張員は深い笑顔を作つた。そして私たちを見て何かいひたさうにした。

私たちは又登りつゝけた。

路には、立ち木を倒して、通るなといふやうにしてあつた。その外には行かれる所も見えない。一ついきの熊笹は丈が高くなつてゐた。

『宿で少し見るといいんですがね……』

出張員は立ちどまつて呟いた。そして腰に吊つてゐた山刀を出して、其所の立ち

木の幹を削つて、鉛筆で何か書いた。そして振り返つて、ついて来いといふ顔をして、路の脇の熊笹の中へと、ざわ／＼と音を立てながらはいつて入つた。

私たちは後についた。

『此りや初めてぢや分りませんね。』

『此の上に崖くづれが出来てしまひましてね。』

熊笹が盡きると、足下には崖が出来てゐた。岩に沿つて細い赤土の路が新たに出来てゐた。

崖を下りた、そして又上つた。木の根や、木の枝に縋つて這ひ上るやうな崖であつた。手を懸けなくてはゐられない一本の細い樹の幹を白く削つて、何か書いてあつた。それは私の生れた村の名前で、其所の釀酒組合の登山したことが書いてあつた。

何時か樹立はまばらになつて来た。下生えの笹は小さい葉となつた。

『此れが大噴火の時のものですよ。』

出張員は立ちどまつて路の脇を見た。二坪ばかりの土は、掘り返した跡といふことを思はせるやうに土が浮き立つてゐた。その真ん中に、一つの石が頭だけを出して埋つてゐた。

『此れが飛んで来たんですか？』と鼻は見入つた。

『大きな石ですよ。——あれなんかも、その時の被害です。』

指の向つた方には、何かの大きな木が、地上三四尺の所から、丁度小枝の折り取られたやうに取られてしまつて、さゝくれ立つた木口を見せてゐた。木口はもう赤く朽ちかゝつて居た。

『石があたつたんですかね？』と私は眼を見張つた。

『えゝ。』と平氣で言ひながら出張員はすたすたと登つて行つた。

振り返つて見たが、その石は何所へ飛んで行つたのか見えなかつた。

『こゝが頂上です。』

出張員はさう言つて私たちを振り返つた。私たちは彼の顔から眼を周圍に走らせた。

そこは山の頂上によくある小さな平地でたつた。空は眼を移すに随つて、高原に見る薄青さをもつて廣がつた。そしてその空の下には、幾つかの高山の頂が、丁度こゝを中心にしてゐるやうに浮び上つて居た。日光は、日の近さを思はせて、寂しく、さらさらと輝いた。

私たちの立つてゐる所は、今まで登つて来た硫黄岳の頂上の、一方の端であるのを見出した。振り返つて見ると、私たちの直ぐ後ろは一段と高くなつてゐて、禿山の上にごろごろと大きな岩が立つてゐるばかりであつた。その岩の間から、黄ろく枯れた芝草の上から、丁度鐵瓶の口から湯氣の立つやうに、白く、ぼかぼかと煙が立つてゐた。そこにも、こゝにも、幾つもある。

『あれ煙ですか？ 以前火山だつた跡と見えますね。』

私はさういつて出張員を見た。出張員は平氣な顔をして、

「え、煙つていつでも本當は湯氣ですね。側にある草の葉が濡れていますよ。」
さういつて彼は、その山とは反對の側のを指さして、

『あれが燒岳です。』

私たちは不意に物をいひかけられたやうに軽い驚きをもつてそちらを眺めた。

私たちのすぐ前面に當つて小高い一つの峯が、ここに出來た腦のやうに立つて、
樞と見える暗緑の針葉樹に蔽はれてゐた。その上を越して、焦げ茶色をした山が、
すうつと、右から左に懸けて、其の頂きを見せてゐる。そして、其の上に、雲かと
見える白い物をたなびかせてゐる。

『あれが噴煙？』

『え。』

薄青く光つた空と、死滅の感じを起させる焦げ茶の山とを眼を見張つて私たちは
暫く眺めてゐた。

『一ぶくしようか。』

出張員の言ふまゝに、私たちは著て來た糸だてを脱いで、一つの岩の下に敷いた。
そしてその上へ、並んで腰を下した。

明るい日光の中を、涼しい風が動いて居た。後ろにも前にも噴煙を眺める山の上
には、何の聲も無かつた。

シガラの煙は、青く立つては消えた。

『變ですな。信州ではこの山を硫黄岳、あちらを燒岳と言つてゐんですが、飛驒の
方では、全く反對に言つてゐるんですよ。』

出張員はさも興味のあることを知らせるやうに、その細い眼をかがやかせて居た。
私たちは唯うなづいて見せるばかりであつた。

私たちは黙つてしまつて居た。私たちの前は低い笹原になつて居た。登つて來た
路は、その中を縫つて、あちらへ、今度は下りになつて行つた。下りの方の山腹は、
不思議に樹立がなくて、青草ばかりであつた。その路を追つた眼は、直ぐに一つの
大きな豁谷を越えて、あちらに聳えてゐる連山に捉へられた。

「あの高い山は？」

「あの笠のやうに見える圓い山ですか？あれは飛驒の笠岳かさたけです。今私たちのゐる所が、信州と飛驒との本當の境なんですわね。」

「へえ！ちや私たちは飛驒の風に吹かれてゐる譯だ。」

私はさう言つて、獨りで微笑した。

「頂上まで何れ位です？」

舅は出張員に尋ねた。

「十五町つてますがね。」

出張員はさう言つて、笹原の中に立つてゐる標示杭に指ざしをした。そこに標示杭のあるのを私も氣が附かなかつた。

「出懸けませうか。」

私たちは立ち上つた。敷いてゐた糸だてを又背中に著て、紐を締めながら焼岳の頂上と其の噴煙とに眼を放つた。

「私はこゝでお別れします。お話ししましたやうに、私は此所を傳つて下りまして、裏山の方へ廻つて、新しく出來た噴火口を見ようと思ふんですから。——登れるか何うですか。この前でさへ随分危険でしたから。」

出張員は、硫黄岳の頂上から續いてゐた出鼻の先きまで來ると、立ちどまつて、さみしい微笑を浮べて私たちを見ながら言つた。その眼には、心もとない者を危険な路にやる時の長上かつへの者のやうな表情があつた。

我たちは頷いて答へた。そして初めて全體を私達の前にあらはして來た焼岳を見上げた。

山に向つた私の顔は、その瞬間に、何物か強い力の者にはつと打たれたがやうに感じた。私は眼を据ゑて、闇の中をすかして見るがやうにしてちつと山を見詰めた。

何といふ奇怪な存在物であらう！信飛の國境に聳え立つて、一萬尺にも近いと言はれてゐるその山は、全山たゞ焦げ茶色になつてゐる。我と吐き出す火に焼いて、その外面の肌までも、もう全く焦げ茶色に焼いてしまつてゐる。その上には、何所にも一點の緑も持つてゐない。

そしてその山は、今も尙ほ焼けつゞけてゐる。岩から岩と攀ちながら、やう／＼に登れさうな峻しい山の頂上は、屏風のやうに、烏帽子のやうに、重しのやうに、今にもくづれ落ちさうな灰色に晒された岩を載せてゐるのであるが、その岩の上は、端から端まで、頂上を連く一線をどめて一面の噴煙である。白く、もう／＼と、吐いても／＼吐き盡せないやうに煙を吐きながら、そして吐いた煙を其所にとゞまつた雲のやうにかたまらせてゐる。

私の眼は、頂上より裾へ向つて、眞つ直に、深く走つてゐる三すぢ四すぢの隙隙を見た。頂上に近いあたりに、不思議にもころび落ちずにとまつてゐる幾つかの岩の側から、白く煙を吐き出してゐるのを見た。更に彼方、飛驒に面した方にあたつ

て、山腹は長く長く、何所までも伸びてゐて、そしてその面には、一抱へもあらうと思はれる大木の一面に蔽つてゐたのが、今は噴火に焼かれて葉も枝もなく、ただその幹だけが、一様に灰白色になつて立ち重なつてゐるのを見た。

私の眼は山を越えて空に走つてゐた。それは高山の上でなければ見られないやうなうす青い、純粹な、我と顫へるやうな色をした空であつた。そこにはもう秋の静けさとなつかしさとが漂つてゐた。日光は其の空にしみて、あふれて、明るくも躍つてゐた。

その空は、彼方に、此方に、その一角つゝをあらはしてゐる濃緑の峰の上に接してゐた。空に見えた寂しさと美しさとは、其所にもあらはれてゐた。

その空の下に、その空の抱くものゝ中心のやうになつてゐる焼岳。それは本當に何といふ奇怪な存在物であらう！それは死である、淺ましい死である。否、天地の中に隠れてゐる死の、まざ／＼と白日の下にあらはれて、その力の如何に強大であるかを見せてゐるのである。死の力の強大であるのに、我と勝ちほこつて、溺れて

ゐるのである。

測候所の出張員の聲は又耳に入つて來た。これは遠くから聞えて來る聲のやうに耳を掠めつゝ聞えた。

『ではあの、一番左の澤へ附いで、あの大きな岩、あれを日あてにお登りなさい。頂上へ近くなつたら、右の澤へ移るのです。——ひよつとしたら私は、頂上の噴火口の所でお目に懸れませう。——お大事に。』

さう言ふと出張員は、右の方、飛驒へ面した方へと下りて行つた。麻の背廣に、烏打帽をかぶつて、腰へ麻繩と山刀を吊つた長身の人の後姿は、見る見る小さくなつて行く。灰白色の樹立は、吸ひ込むがやうにその人の後姿を紛らしてしまつた。

私たち——舅と私とは、教へられた通りの路を歩き始めた。日光はまともにきら／＼と焦げ茶色の岩石の面にあたつて、眩しく反射した。缺けた石と石とは一あし毎に草鞋を噛んだ。が私は額に涼しい風の觸れてるやうな感じがした。

全身の力は、草鞋の底の感觸に集つてゐた。眼は一あし一あし移して行く足もとに吸ひ附けられてしまつてゐた。見上げて悸えを感じた山は、その頂上にある自身を描くともない描くとも、躊躇しずにはゐられないやうに感じられた山は、不思議にも、一あし一あし移つて行く脚の下に、今小さく踏まへられてゐるやうに感じられて來た……。この不思議な變化に包まれながら、私たちは黙つて動いて行つた……。短いやうにも、又長いやうにも感じられる時は過ぎて居た。草鞋の底の感觸にのみ縮つてゐた山は、次第に又廣がつて來た……。大きい、高く、悸えを感じずには居られないものになつて來た。

足もどから眼を離して見上げると、先に立つて登つて行く舅の、糸だてを著て、鏝廣の麥藁帽子を被つた後姿が見えた。又それが、あはれな、丁度木の葉の裏を這つてゐる虫を見るやうにも見えた。

『一息入れませんか?』と言つて舅に聲を懸けた時には、私は立ちどまつてしまつてゐた。

『あゝ。』と言つて舅も立ちどまつて、振り返つて私を見た。私たちの聲は、周囲の静寂の中に吸ひ取られるやうに感じられた。見合せた私たちの眼は、直ぐに頂上に走つた。

高く望んだ頂上は、何時かもう直ぐに頭の上に廻つて来てゐた。其所には屏風のやうな岩が峙立つてゐた。其の岩の灰白色の面を眼でとめると、岩が盡きて、頂上の一歩となつてゐると思はれる所がくぼく見える。と又此方に向つてくづれ落ちさうな岩石が峙立つてゐる。

煙は頭の上を蔽はうとしてゐる。私はその煙の中に向つてゐるのを思つた。

空は濃い青と變つて来た。前に望んだ空は後ろに展けてゐた。ゆらくと揺れるやうに見える空は、眩しい日光を私たちの周囲に廣く注ぎ落して来た。次第に細かく灰白色になつて来た破片の石は、一面に山を埋めて、日光にさみしく光つてゐる。振り返ると、目あてにと言はれた大きな石は、何時か後ろになつてゐた。そして私たちの直ぐ側の一つの岩の下からは、一すぢ二すぢ煙が噴き出してゐた。

『大分硫黄臭くなつて来た。これで、風の向きでも悪くて吹きつけられるとたまらないね。』
舅に言はれて私は鼻を鳴らした。硫黄のにはひは寂しく暗い氣分を湧かせた。

『路が違ひやしないのでせうかね?』

又登り始めて間もなく、私は舅に聲を懸けた。私たちの歩いてゐる所は、破片の石の上に、一層細かい破片が丁度路のやうになつて續いてゐる所であつた。それは路とも思へ、又大きな破片のころがり落ちた跡の、やや高く、背になつた所のやうにも思へた。

『かういふ山にや極つた路はないもんだ。こゝも誰か歩いたらしい跡がある。』

舅はさう言ひながら歩みを續けた。人の踏んだ跡と思はれる所もあれば、時には切れ草鞋の棄てたのも見えた。

『測候所が、右の澤へ渡るんだつていやしませんか。何だか段々左へ左へと寄つて

しまふやうですよ。』

『あゝ——』と舅は言った。そしてあたりを言廻して、『いつその岩まで行つてあの下を渡つた方がいゝらしいな。』

私たちの踏む路は、全くの細かい石の破片ばかりとなつて来た。そして険しい勾配になつて来て、立つては歩けなくなつて来た。力杖を持った手は、自然に土の上につかれた。と草鞋の底の砂利に似た小石はざら／＼とくづれて落ちた。無意識に取り纏るものをもどめた手は、取り纏るべき何物も見附けられなかつた……。

私たちはいつか澤を越して、その上へ出てしまつたのだ。

『とにかく、右の方へ行かうぢやありませんか。』

私は舅にさう言つた。足を移すたびに、草靴の底の小石のくづれて落ちるので、私はもう其所へ力を入れることが出来なくなつてゐた。と足の裏はくすぐられるやうで、力は胴にはいつて来た。私の體は宙に浮いてしまつて、やう／＼に這ひついてゐるやうにも思はれた。

舅は黙つたまゝ、横の方へ移らうとした。ざら／＼と高く音を立て、草鞋の下の小石はくづれて落ちた。

『却つてあぶない。やつぱりあの岩の下まで行つた方が大丈夫だ。——もう一息だ。』
私たちは岩の下に出てゐた。そこにも足場は無かつた。岩も取り紛ることは出来なかつた。が私たちは其所を横切るより外には他に方も無かつた。

先に立つた舅は、體をかしげて、山の腹にもたれかゝりながら、足を踏み伸して草鞋で砂利を掻き寄せて足場を拵へた。その草鞋の下に續いて、削つたやうな急な傾斜は一直線に續いた。一あし體を移しては、同じことを繰り返した。

私は黙つてそれを見てゐた。頭の上に蔽ひかゝらうとする硫黄は、そのにほひを失つてしまつてゐた……。

『舅が足を迂らせても、私が迂らせても、何方でも、手を伸して助けることが出来ないんだ……。』

さういふ心持が私の胸に走つた。山に縋りついてゐる自身が見えた。縋つてゐる力

がぬけて行かうとしてゐる自身が見えた。寥廓とした天地が見えた。冷たい息が顔にさはつた……。

私は此の瞬間の私を見ようと思ふ心に驅られて、眼を放つて四方を見廻した。

私たちは噴火口の口もとに立つた。

それは岩山の上に穿たれた井戸のやうであつた。井戸の口に一杯になつて、溢れて、もうもうと白い煙は立ち騰つてゐる。我と噴き出る力で渦巻をつくりつゝ、もうもうと立ち騰つてゐる。そして青空の下にたなびいた。

私たちは噴火口の内を見ようとした。私たちの踏んで立つてゐる側は、覗き込むことが出来さうにもなかつた。が向ひの側は、煙の渦巻いて動く途端に、ちらりと見ることができた。それは、深く剝り取られたやうな岩石であつた。その面は、赤く、黒く、そして不思議に濕ひを帯びてきら／＼と光つてゐた。剝り取られた大きな岩石は、くづれ落ちて噴火口を埋めようとしてゐる。煙はそれを支えるやうに這

ひ上り這ひ上りして、つとくづれて、亂れて、噴火口の上に擴がつた。

その噴火口は、此の山の頂上を貫いて幾つとなく並んでゐるその一つであるのを思つた。地軸まで貫いてゐる噴火口は、遠い遠い淺間山と連つてゐるらしく、彼方が強くなれば此方が弱くなるといふ關係を持つてゐるらしいと思はれてゐる。現に此の山の登り口であつた硫黄岳にも、幾つとなく小さな噴火口があつた。登つて來た路にもあつた。——私たちは今、噴火口の上の薄い地殻の上に立つてゐるのである。本當に、此の地殻は何時破られるか知れない。次ぎの瞬間には破れないといふことを誰が保證が出来よう。そして破れたとしたら？ 硫黄岳の上には、燒岳の爆發の日のものだといふ大きな石が、地の中に落ち込んで、その一角だけをあらはしてゐるのが幾つもあつた。そして此の山に一點の緑の無いのも、熱灰の爲にその根までも焼きつくされてしまつたのでは無いか。

もう／＼と渦巻いて立ち騰る白い煙は、私の眼を惹きつけた。それは眼をはなし難い秘密を帯びてゐる。赤く黒く光る岩の面が見えて、直ぐに暗くなつた。

私はシガーに火を移した。鼻は背中の中の包からサイダー瓶を出して、口うつしに水を飲んでみた。

かうした所に立つてゐても、平生と少しも變つた所も見えない人間の顔といふものを、私は尊くも、つまらなくも思つた。

澤を傳つて下り路についた。

岩から岩へと、丁度梯子段を下りるやうな安らかさをもつて私たちは下りた。澤は深く、私たちは肩から上だけを山の面にあらはしてゐた。

とある所で私は、顔をあげて眼を前方に放つた。と私は立ち止つてしまつた。

焼岳の北方の面は、丁度裾から見上げた時と同じやうに、今私の二つの眼の中に収まつてゐた。焦げ茶の岩石の山は、峻しい傾斜をもつて、ずつと裾まで走つてゐた。硫黄岳も低く見えた。灰白色に枯れた樹立は、平らに並木のやうに見えた。

眼を上げると、硫黄岳を越えて、穂高岳は嚴かに眞つ直ぐ前に立つてゐる。青黒

い中からあらはれる赤い肌と、ちら／＼とかいやく雪田とは、眼を引きつけた。穂高岳の後ろには、同じ程の高さを持つた山が、更にその後ろを暗くして聳えてゐた。それは初めて眼に入つたものであつた。それより稍々右に離れて、飛驒の笠岳は、ほゞ同じ高さの幾つかの峰の間に立つて、笠のやうな形を空に捧げてゐた。そちらの山は、うるほひを帯びて濃緑につままれてゐるので、柔かく感じられた。左の方は、穂高岳と並んで、削つたやうに急な霞澤岳が空に浮んでゐた。その間にある梓川の河原は、見えるかと思つて見たが、眼には入らなかつた。

眼にはいるものはたゞ一色の青であつた。うす青い空と、青黒く重疊した山と、たゞそれだけであつた。私は海に向つてゐるやうな氣がした。が其所には、何の音も無かつた。鳥の聲も聞えては來なかつた。そして動いてゐるものも無かつた。たゞ日光だけが明るく、その青い上に流れて、靜かに光つてゐるのみであつた。

私はぢつと眼を据ゑて、其方を見た。今、前穂高の山腹から、笠岳の山腹へかけて、青い谷の上にうす暗い影が靡いた。それは空の雲より外には拵へることの出來

ないと思はれる大きな影であつた。

雲は無い譯だが……と思つて、私は空を仰いだ。空には何も無かつた。

振り返つて、下りかけた焼岳の頂上を仰いた時に、私は、『あれか——』と心附いて呟いた。それは噴煙の投げてゐる影であつた。正午に近い太陽を負つてゐる噴煙は、その影を遠く、其所まで投げてゐるのであつた。

その影の中に、私の眼は更に別な物を捉へた。それは青い上にこぼしたやうな、小さな、灰色のものであつた。ぼら、ぼら——と三つばかりになつてゐた。

屋根のやうだが……。私はさう思つた。が、さうした所に家があらうとは思はれなかつた。

やつぱり家らしい。屋根より外にはあんな形をしたものはない譯だ。家と思ふと私は、俄に驚くべき不思議なものを見附けたやうな氣がした。

ぼんやりとしてゐる私の頭の上を、岩燕が一羽齧つゝゐるのを見た。音も立てなくてその鳥は、たゞ一羽で、青い中にたゞ一つの死んだものであるやうな噴火山の

上を、その頂上よりも高く飛ばうとするものゝやうに、空に齧つてゐた。

鼻の呼ぶ聲がかすかに聞えて來た。

半時間の後には私たちは、登り口であつた硫黄岳の出鼻に立つて、振り返つて今更のやうに焼岳を眺めてゐた。(二二〇、大)

日
本
ア
ル
プ
ス
へ

朝飯をしまふと、私と甥とは隙子を取り外した座敷の縁側へゐざり出して、庭を眺めながら煙草をすつてゐた。

庭の樹立は青々と繁つて、築山の苔はうるはつたやうに見えた。泉水の水は青葉を映して、静かに、溢れさうになつてゐた。瀧の音は涼しく鳴つてゐた。

樹立を越して、雨の切れた空は青く光つて見えた。白い雲が柔かく浮んでゐた。それは東京に居ても、思はうとさへすれば何時でもあり／＼、眼の前に浮んで来る庭で、そこにゐるやうな氣さへもするのであつた。が、此所へ歸つて来た翌朝は目新しく、まだ見たことのないものゝやうにも思へて、そして久しく見なかつたのを悔いる心も起させたのであるが、今朝はまたすつかりもとへ復つて、何の珍しさも美しさもないものになつてしまつた。

『山へ！——』

東京を離れる時に思ひ詰めて来た登山の願ひは、はげしく胸に起つて来た。それは此の機会をにがすと、またも来ないものゝやうに思へた。そしてその機会は、今

逃げさうにしつゝある。私の心は今、張りがなくなりか、つてゐるのだと思つた。

「T君が來さへすれば直ぐ立つんだが……。」

私はさう思つた。T君は少しおくれて東京を立つて、此所で落ち合つて一緒に山へ行く約束になつてゐる。片心持つてゐたT君が、何ういふ譯か今朝はあてにならないやうな氣がされた。東京が遠い氣がする……。T君のせはしい生活が思はれる……。

「おい、今日は幾日だい？」

甥は笑つて、「日を忘れるなんていゝね、七日だ。この五六日が盆前つてので、何所でも眼を皿のやうにしてゐる」

「七日だと、いよく明日はTさんが來る日だがね……。」

「きつと入らつしやる？」

「さあ……、さう思つてゐるんだけど。」

……明日立つといふ日、打合せの爲にT君の家を尋ねた。T君は旅行前とも思は

れない落ちついた静かな顔をしてゐた。

「實は此れから君の所へ行かうと思つて居たんだが……。」

駄目だなど直ぐに思はせられて、私はがっかりしてT君の顔を見詰めた。

「僕、八日までは何うしても動かれなくなつちまつたんだがね。君一あし先へ行つて、呉れないか。」

その時のT君の、氣の毒さうにした顔が胸に甦つて來た。私はその顔からT君の本當の心持を讀まうとするやうにした。

「……一つ、電報で照會して見てくれないか。——電報、村で打てるね？」

「えゝえゝ、電報どころぢやない、この頃ぢや長距離電話さへ利く。」

頼信紙を持つて下の甥は郵便局へ出て行つた。

T君から返電が來た。十日でなければ立てないといふのであつた。それを前に置いて私はちつと見詰めてゐた。

「私は一人で出懸けるとしよう。」

甥は黙つて私の顔を見た。その顔には、「……また始まつた——」といふやうなかすかな笑ひが見えた。

『此所で待つ位なら山へ行つて待たう。——なあに、出りや何うにかなる！』
『は、は、は、そりや出りや何うにかなるには極つて困つた伯父だといふやうに投げ出した調子で甥は言つた。』「たい山へ登らうなんて了簡が違ふんだがね。」

私は黙つてゐた。

『あ、出懸けるんなら其の前に、一度Y先生に逢つとくといふ。——直ぐ迎ひをやらう。』

甥はさう言つて、急いで勝手の方へ起つて行つた。

昨日の夕方私は餘所から歸つて来て、留守にYの來たことを聞いた。彼は伊豫から、年々の習慣に隨つて、郷里の家で盆を守らうと思ひ立つてはる／＼歸つて來たので、今ステーションから家へ行く途中だとのことであつた。そして私が東京から歸つて來てゐると聞いて驚いてゐたと聞いた。

『よう！』

『よう！』

私とYとは顔を見合せると、さう言つて挨拶をした。微笑は暫く顔から去らなかつた。

『よく歸つたね。』

『うん、十日ばかり遊ぶと飽き飽きしちまつてな、考へて見ると後まだ二十日も休みがある。急に歸るゝになつてやつて來た。』

『いゝ色してるな。』私はYの顔の色に氣が附いて笑ひながら言つた。

『まあ見てくれ、この通りだ。』Yはさう言つて、くるりと彼方向きになつて、肌ぬぎになつて脊中を見せた。幅の廣い肩は黒赤く、てらく／＼と光つてゐた。

『何て色してるんだい、人間らしくない。』

『は、は、は。』とYは明るく笑つて、今度は兩方の足を投げ出して見せた。此方も同

じ色をしてゐた。

『松本から、この儘で端折りをして来たが、我ながら黒いと思つたな。』

甥はつくづくと足を眺めてゐた。

『大丈夫だ。誰でも紺の股引を穿いてる思ふから。』

『ひどい事を言ふ。』と言つてYは足を引つ込めた。

『時に、山へ登るんだつて?』

Yはさう言つて私の顔を眺めた。その眼には疑ひと一しよに、からかひの色が漂つて居た。

『あゝ。』

Yは私の顔から眼を離さない。その顔を見返すと私の胸にはふと影のやうに映つたものがあつた。それが直ぐに口へ出た。

『おゝ。一緒に山へ行かないか?』

『山へか?』

『あゝ。かういふ機會はないよ。記念の爲に一緒に行かうぢやないか。』

Yは急に改まつた顔をして、

『僕は、とても山は駄目なんだ。此れだから……』と、両手でやう／＼に抱へるといふ恰好をして、ビール樽のやうに太つた腹を突き出して見せた。そして苦しさに眉を顰めて、『……實に駄目だ。去年生徒と一しよに嚴島へ行つたが、ちよつとした山だつたが登れなかつたからな。』

『ぢや上高地まで行かう。——本常は僕だつて山は怪しいんだから。』

『上高地へはもう二度も行つてるんだがな……』

『それなら尙結構だ。……家でごろ／＼してゐるよりや好いよ。』

『それもさうだが……。どう／＼おれを案内役にしまふのかな……。——待てよ、だが僕は支度がない、此れつきりで来たのだから。』

さういつてYは著てゐる單物を撫でて見せた。

『支度なら間に合せるよ。』

『だつて此の足に合ふ脚絆があるもんか。』
 『脚絆の心配なら引受ける。』と甥は口を入れた。『卷脚絆が隣りの家にあるから借りて上げる。』

間もなくカーキ色の卷脚絆は下の甥によつて持つて來られた。桑摘みに雇はれて來てゐる兵隊上りの青年はその足へ器用にそれを巻き附けた。

『何うだい?』とYは歩いて見せた。

『上等だ。……この頃は八百屋の御用聞きまでがそれをやつてるね。』

『何だ、今度はおれを御用聞きにしちまつた。』

『時に何時行く?』とYは改まつて相談した。『僕は十三日にや歸つて行かなくつちやならないが。』

『明日にしよう。島々泊りつてことに。——それまでに僕は、舅の家へのつびきならない用があるから今夜泊りがけで行つて話して置かう。』

『では支度して、僕が彼方へ寄ることによしよう。廻りでもないから。』

『かうと、……それぢや明日。』

Yは急に忙しくなつたやうに、そは／＼として歸つて行つた。

家を出たのは夕方であつた。舅の家の用談を済まして、一晚泊つての午後であつた、私は舅に山の話をした。

『Yさんと、それは好いお連れですね。』舅はさう言つて、羨しいやうな眼をして私を見た。

『いかいですが、あなたも入らつしやいませんか。』

『さうですね……。』と舅は、眼を庭へ向けてちつと一どころを見つめながら、ぼつり／＼と前齒で茶菓子を嚙んでゐた。

『實は何です、上高地の絶景だつてことは聞いて、一度行きたいとは思つてましたかね。』

『では入らつしやいまし、思ひ切つて。』

「は、は、は。」と舅は軽く明るく笑つた。「さうですね……」と言ふ言葉には行かうといふ響があつた。

甥が尋ねて來た。風呂敷包みと、糸だてと鍔廣の麥藁帽などを一かゝへにして。それは昨日頼んで置いた私の旅支度であつた。

「Y君は？」と私は聞いた。

「Y先生は急に行かれなくなつたつて斷りに來た。本家の東京へ療治に行つてゐる子が危篤だつて電報が來て、両親は今朝立つて行つて、其の留守を頼まれちまつたさうだ。ほかの事とは違ふからつて、残念がつてゐた。——時に、何うしますか？」

「行くよ。それに此方のお舅さんも行かうと仰しやるから。」

「へえ！」甥は思ひ懸けないやうに舅の顔を見た。

二人の話を聞いてゐた舅の顔には當惑の色が浮んでゐた。

「……實は何です、Yさんも入らつしやるつてますから、それだと歸りのお連れもあるからと思つて、盆前三四日つて所を無理に都合を附けたんですがね……。」

何うです、あなたも？」

「私はこゝ十日ばかりはどても——」と甥は手を振つて見せた。

「さうですか。」

甥は急に氣せはしさうにして、旅支度を入れた風呂敷包を引き寄せながら、

「さういふ御都合だと、お急ぎにならないと。——もう大分遅うござんすよ。」

舅は起つて坐敷を出て行つた。

甥は包みを解いた。

「此の脚絆が合ふか知ら？ちよつと附けて見て。それから糸だてだが、此れは此方を表にしないと毛が襟にさはるから。——あ、帽子へ真田を附けるのを忘れた。」

真田紐をもらつて甥は帽子へ附けてゐた。私は脚絆を穿いて見た。

「あ、違ふ／＼！それは右だ。」甥は後から聲を懸けた。「……脚をぐつと伸して、其所へ皺の寄らないやうにするのが法ださうだ。——女房役は骨が折れる。は、は、は。」脚絆を附けた後で私は甲掛を穿いて、庭先の沓脱ぎ石の上へ下りて見た。

『こりや大き過ぎる。』私はさう言ひながら足の指を動かして見た。が甲掛の先は動かない。『一たい誰のだい？ばかに大きい足ぢやないか。』

甥は其れには答へなくて、小首を傾けて、子細らしく私の足を眺めてゐた。

『何うも歩けさうもない足つきたな……。』

私は脊廣に着かへた。

『氷砂糖とわさび漬は此所へ入れとく——』と言ひながら、甥は私の脊負つて行くべき風呂敷包みを拵へてゐた。

茶の間へ出て行くど、舅は家の處に取り圍まれながら、何か用をいひつけるやうに言つてゐた。やはり脊廣を着てゐた。——姑は提げ鞆に紐を附けて肩へ懸けられるやうにしてゐた。男の子は糸だてへ紐を附けてゐた。

『出来ましたね。』

『まあ！』義妹たちは糸だてを抱いた私を見上げて眼で笑つた。

草鞋を穿いた足は軽く出た。糸だては脊中で揺れた。西に傾いて来た日光は、帽子の底を掠めて顔にあつた。私は道連れになつた舅の旅姿を不思議な心持で眺めずにはゐられなかつた。

賑かな笑ひ聲が後から聞えた。見送の人たちがまだ見送つてゐるのだと知つた。

姑の笑ひ聲だけが、その中から高く響いて来た。

舅は歩きながら時計を出して見た。

『何時です。』

『四時を廻つてますな。』

『そんなですか、ちと遅くなりましたね。』

私たちは往還へ出た。幅の廣い飛驒街道は一つづきの青田の中へ、眞つ白に乾きながら遠くうね／＼と見えた。眼をあげるとうす青い空は、半圓になつて眼に一杯に映つた。その下に、暗緑の連山はかつきりと浮んでゐた。

『山へ——一切を離れて山へ——』

長い間の願ひは、今初めて胸から流れ出して行つた。私の心持は小鳥のやうに軽く躍つて來た。

徳 本 峠 越 え

夜が明けて来た。

けんく、けんくど、死の悸えから鳴いてゐるやうな犬の聲、夜陰を貫いて一晩中聞え通してゐたその聲は何時か止んでしまつてゐた。顔の上に飛んだ蟲は、——たたくと掌にも残らなく死んではしまふが、直ぐに後から後からと飛んで来た蟲はもう來なくなつてしまつた。その代りに、もうもうと、鈍い牛の聲が聞えて來る。しらしらと障子に明るさは漂つてゐる。眼はそれを見てゐるが、寢不足の頭はぼんやりとしてゐた。

鼻はあちら向きに眠つてゐた、黒い鞆は枕もとに置いてあつた。ぐつすりど眠つてゐるらしいのを見ると、眠らうとすれば何んな所にでも眠れるその體に、弱さうに見えながら私にはない強いものを持つてゐることを思はせられた。

顔を洗つて來ると、昨夜錢湯へ案内した老婆が茶を連んで來た。

『何だか羽のある蟲がゐるね、蚊ぢや無いらしいが。』

『蛸たことか言ひますよ。明りをつけて障子を明けて置かうもんなら、それはたまりま

せんよ。』

土地の者ではないらしい調子で、それに困つてゐるのだと訴へるやうに言つた。それならば前に注意すればいゝものをもと思つて、私は苦笑する外はなかつた。廣蓋で朝飯を運んで來た。昨夜の小女は、盆を膝の上に置いて、ちよこなんと据わつてゐた。泣かうとしてゐるやうな眼もどが、ともすると眠さうに曇つて來た。僅かの茶代に上さんは、急に世辭笑ひをした。

『その草鞋ではけんのんでござんす。一足づゝお持ちなさんし。道中はもう見つとも無いも何もありませんよ、支度が第一でござんす。これ私が附けて上げます。』さういつて上さんは、子供に附紐を結んでやるやうに前から抱きつくやうにして後ろへ手を廻して、草鞋を腰へ結び附けてくれた。

『道は？』と舅は聞いた。

『え、直ぐ其所からおまがりになりまして、眞つ直ぐに、眞つ直ぐにと入らつしやいます。——左へ折れる道がありますで、曲らないやうに。』

夏の朝でなければ感じられない涼しい空氣は、やさしい青い空から地にと満ちてゐて、快く私たちの顔にふれた。

山と山の底に、灯かげに濡れて靜かに眠つてゐるやうに見えた昨夜の鳥々のうつくしかつた町は、けばくしい驛に變つて私たちの前につゞいてゐた。

夏蠶の繭をかいてゐる家、蠶糞を軒下にはした家、さうした家の軒下を通つて、細い路は山と山との間に上つて行つた。

私たちはいろいろの緑の中にはいり込んでしまつた。前も後も、右も左も、上も下も、皆な緑であつた。そしてその緑はかゝやいて動いた。

水の中にある小魚のやうだ——と私は自身を思つた。歩きながらも眼を漂はして見上げ、見まはしした。

私たちの歩いてゐる所は、山と山とのつゞいてゐる谷底を流れ落ちて行く、その谷川の岸であつた。

山は高くはないが、頂きを見るには仰向いて見なくてはならないやうな峻しさを

持つて居た。山の肌を蔽ひつくしてゐる樹立は、青と緑と、ところ／＼に濃緑を點じて、隈をつくり合つてゐた。その中からぬつと、高い岩があらはれた。

流れは谷川の姿をしてゐた。青い水は岩に觸れて、絶えず白く碎けた。大きな岩に遮られた水は眞つ白に散つて、次ぎの瞬間には眞つ青に、靜かに淀んだ。騒しくはあるがその中に不思議な單調を持つた瀬の音は、澄んだ、何所か遠くからの音のやうに聞えた。

日光は山の頂きの青い上にかゝやいた。流れはたゞ谷の青さに煙つてゐるばかりであつた。

路は山の腹につけてあつた。流れを眞つ直ぐに眼下にしてゐた。爪先上りのその路は、俄かの變化に眼を見張る私たちを夢のやうに導いた。さわやかさと、すゞしさにとそは／＼とする私たちを、うねり／＼しながら導いて行つた。

路の脇の小高い所に、白ペンキで塗つた掲示が立つてゐた。研究の爲めとしての許可を得た者でなければ、高山植物は取ることを禁じるといふ意味が書いてあつた。

『もうこんなものがあるんですね。』と私は呟いた。山深くはいつて来たやうな氣が急にされた。

私たちの前に、ぼつつりと人が一人見えて来た。

その人は背中に高く荷を背負つて居た。こちらから見ると荷だけが眼について、その下にはあらはれてゐる脚は極めて短く見えた。ぼつり、ぼつりと動くか動かないか分らないやうにのろく歩いてゐた。その恰好は一目見た時にはをかしく見えたやがてをかしさを失つて来た。縁にかゝやいてゐる山と山とは、その人の後姿を、小さな醜い、ぐづ／＼とごめいてゐる蟲かたそのやうに思はせて来たからである。私たちは直ぐに追ひついた。その人は振り返つた。それは若い男で、日にやけた赤い顔に微笑を浮べて、

『今日は。』と挨拶をした。

私たちも挨拶をかへした。

男は路を譲つて後になつた。明るい、子供のやうな表情をもつたまるい眼は、何

を思つてゐるも見えなかつた。

『上高地まで行くのかい？』

『いゝえ、岩魚いわなどめの茶屋まで。』

暫く一しよに歩いてゐたが、振り返つて見た時には、緑が谷にかゝやいてゐるばかり、男の姿は見えなかつた。

『あの連中は米一俵を背負ふつてことになつてゐるんです。それに小附けがあるで、まあ十五貫以上ですな。可哀さうなものです。』

男は歩きながらかう話した。

『山の色がすつかり違つて來ましたね。』

私はさう言つて、今更のやうに山を見上げた。そこには濃い緑が消えて、一樣のうすい青さになつてゐた。それは平地の初夏にだけ見るやうな柔かいものであつた。日光も何時かはげしい色を失つて、明るく、染み込むやうになつて、谷から谷を照

らし、しらぐと乾いて來た石ころ路を照してゐた。

岩から岩へ架けた橋を幾つか渡つた。流れは足の下に低く遠くなつた。爪先上りの路は、次第に險しくなつて來た。

體は汗ばんで來た。さらぐと岩を傳つて走り落ちる清水を見る度に私は立ち寄つた。男はアルミニウムの水呑みを出して貸せた。

『杖を切つて上げよう。』

男はさう言つて立ち止つた。鞆から小さな鋸を出して、手頃な枝を切つた。そして小刀で小枝を拂つた。

『山へ來るにや山刀が重寶なものだが。——』と言つて、その杖を呉れた。歩みはぼつりぐと重くゆるくなつた。

『實にいゝ柳がありますね。——何うですあれは！』

私は立ちどまつて流れのあちらの岸に立つてゐる一本の柳を見下して指さしをし

た。

『さう!』と舅も立ちどまつた。

水に根を洗はれながら、柳の可なりの大木は立ちつゝいて居た。それは楊柳であつた。幹にも枝にも聊のうねりもなく伸びやかに育つてゐた。まばらに附いた葉は、濃緑の、大きな、丁度夾竹桃の葉を見るやうであつた。素朴な、そしてその中にしなやかさを隠した木は、さわやかにも氣高くも見えた。

『柳があんなに立派なものだつてことを初めて覚えましてよ。——なせ彼れを畫かき書かないでせうね。』

『さうですね、柳の畫は皆なつまらない。』

舅は領いて、さう言つた。近年舅は書畫の蒐集に凝つてゐた。

『これは桂ですよ、知つてますか?』

『いえ。』

路と流れとの間の崖に立つてゐる大木の側に私たちはまた立ちどまつた。

幹も枝も直線をした木であつた。小さな圓い濃緑の葉が簇つて附いて、不思議なまでにさわやかな感じを持つてゐた。

『裁物板くらゐより外使へない木だから、かうした大木が残つてゐるんですね。』

『氣持のいゝ木ですね。』

『かすかな、いゝにはひのする木ですよ。殊に曇つた日になんかは、遠くからほんのりと匂つて、それはたまらない位ですよ。』

柳と桂は次第に多くなつて來た。

『これは橡さくですか!』

『え、橡さくです。』

それは大木であつた。青い大きな葉は柔かに光つてゐた。

『この木は椴びんに挽く木ですね。以前は木地屋は——知つてますか、旅から旅を渡つてあるく木挽ですが——鑑札さへ持つてりや、何所の山の橡の木でも伐つていゝことになつてゐたものです。』

「へえ！、妙なきまりがあつたものですね。」

路に沿つた崖の上には、うす紫の、紫陽花によく似た花が咲きつゞいてゐた。初めは紫陽花かとも思つたが、紫陽花の種類の、がくの方に似てゐると思つた。

「がくですか、此れは？」

「山卯つ木つてのですね。卯つ木の種類で、丈夫な釘になりますよ。」

路ばたの青草の中には、をり／＼見なれない形をした草花が咲いてゐた。心附くと、路の両側の、踏みかためられてかたくなつた土に、丁度細く縁を附けたやうになつて車前草クルマコが生えつゞいてゐた。堅い、そして埃のかゝる土の上でなければ生えまいとしてゐるその草が不思議なものに思はれた。

「莓ですね！」

青草の中に青つ紅に、木莓が熟してゐた。私はかゝんで摘んで口へ入れた。

深く見下した流れは次第に淺くなつて來た。それと共に兩岸の山は狭く閉ぢて來

て、岩山となつて來た。削つたやうな岩の肌は、赤く黒く見えて、水のしぶきに濡れてゐた。

つと流れの中に一つの大きな岩の立つてゐるのが見えて來た。私たちはその脇へ來た時には立ち止つてしまつた。

流れを瀬切つて峙つた岩は、岸に立つてやゝ上目をして見る程の高さを持つてゐた。その上には石楠の木が簇つて、枝をくねらせてゐた。水は巖の脇から走り出して白く瀧になつて落ちた。

兩方から迫つてゐる岩山は、頭の上でくづれようとするやうな形をしてゐた。そこにも石楠があつた。その岩山は流れと一しよに、少し上手でうねつてしまつてゐるが、其所には橋が架つてゐて、橋だけがしろ／＼と見えた。

振り返ると、下流は直ぐ隠れて、眞つ直ぐに眼の向ふ所には、峻しく高い山が聳えてゐた。その山の線はやはらかく、青く煙つて、裾の方には霧をまつはらせてゐた。

青葉のにはひが深くあたりにおどろんで、日光が、遠く、しら／＼と仰がれた
 舅は立ち止つて、ほれ／＼と其の岩を眺めた。

『この儂畫ですね。こんな所こそ半日位見ても飽きませんね。増田でも連れて来て書かせたら楽しみでせうね。』

増田といふのは舅が其の將來に眼をつけてゐる青年の日本畫家である。私は見られてゐる舅の顔から又其の岩へ眼をやつた。

それは珍しい景色であつた。岩と水とは如何にも舅のいふやうに、南畫でなければ見られないやうな形をしてゐた。珍しいからいふ、刺戟的だからいふ——といふ多くの鑑賞家の心持を、私は舅の心に見ずにはゐられなかつた。

『畫にすると、何枚にでも書けますね。』

私はさう言つた。南畫家はこれを一幅にまとめるであらう。そして奇妙な形の中に、自然の持つてゐる生氣を、ここにも不思議に漂つてゐる此の生氣を消してしまふだらう。それが厭だと思ふと、私はさう言はずにはゐられなかつた。

『え、へばな畫かきは、一方から見ただけで書いてしまふが、本當の景色は何方から見てもいゝもんですね。』

『成る程、さうですね。』

ちらりと、川上の方の橋の上を白い物が動いた。登山者だらうと思つた。と私たちの前へ四五人の西洋人が現れて來た。何れも若い男女であつた。男は白の詰襟、女も簡単な白の服を着て、裾を取りながら、すたすたと、やゝ下りになつた路を急ぎながら近づいて來た。

『今日は。』

『今日は。』

男も女も、私たちの後ろを通りながら、かう言つて挨拶をした。私たちは其の日本語に驚かされ氣味になつて返事が出來ずに居た。

一行は行き過ぎてしまつた。その後姿を見送つてゐた舅と私とは、顔を見合せて笑つた。

迫つて来た山は、また展けて来た。

『景色がよくなると思つたら、あすこきりでしたね。』
鼻はつまらなさうに呟いた。

『川があるからいゝが、それでないどたまらない路ですね。』

同じやうな路は、どこまでも、どこまでも、私たちの歩くに随つて續いて行くやうに見えた。氣が倦んで來ると、足は重くなつて來た。僅かばかりの背中の包みも重いやうに感じられて來た。

『辨當食べませうかね。』

『あゝ。』

私たちは、澤から水の落ちて來る所を見つけると、其の側へすわつて、宿から持たせてよこした握飯を食べた。

ふつと、山の蔭から人足が現れた。それはすつと前に、あとにして來た若い人足

と、今一人の年寄つた人足とであつた。二人はにこやかに、聲を懸けて行き過ぎたやはり、ぼつりぼつりと杖にすがつて歩く人のやうなのろい歩調をしてゐた。

瀬の音が荒くなつて來た。眼の下に見た溪流はいつか足の下になつた。川幅も狭くなつて居た。私たちの歩いてゐる路も次第に急になつて來た。

一しきり急な路を登ると、私たちの眼の前につと一軒の家が現はれた。そこはやゝ平らになつてゐて、そして其の上へ、老木が濃い影を落してゐた。木蔭に當つて小さな家がたゞ一軒、漆で塗つたやうに眞つ黒に煤けて立つて居た。岩魚どめの茶屋、と聞いたのが此れだなど知つた。

『おゝ。』と私は聲を立て、自然に駈け出すやうに其の家へ向つた。家の恰好をしたものを見ると、私は珍しい、懐かしいものゝやうな氣がしたのであつた。

圍爐裏はたに、上さんと見える女がゐて、ゆつくりした調子で立つて來て迎へた四十を越した位の女で、髪は櫛卷にして、鏡漿かみを黒々どつけて居た。顔の色は日に

はやけてゐたが、山の中の人に見る白い色をしてゐるので、極り悪さから紅らめた色のやうに生き生きしてゐた。そして、丸い眼は、その顔いろに似合つて見える程に、くりくりと、子供らしい明るい表情をしてゐた。一目に親しみさを感じさせられる顔の一つであつた。

圍爐裏のこちらの側には、さつきの二人の人足と、そして郵便物を持つた若い男が、郵便の上封を讀んだり、葉書の文句を讀んだりしてゐた。とかどかと燃えてゐる火と、黙つて、ゆつくりと落ちついた顔をしてゐる人たちとを見ると、丁度周圍の山や木のやうに、そこには「時」といふものが歩みをとめてしまつてゐるやうにも見えた。

上さんは茶を持つて來た。縁に腰をかけた舅は、こちらの間の、棚の上を見廻してゐた。そこには罐詰と僅かの駄菓子とが並べてあつた。

『その菓子を。』と舅は言つた。そして、『岩魚があるかね?』と聞いた。
『え。』と上さんは笑顔を作つた。

『それちや岩魚で、飯を。』

『焼きまじらずか、煮まじらずか?』

『煮でもらふかね。』

薄荷を入れた麥の菓子が、不思議にうまい。私は皿に盛つて出されたのをあらまし食べてしまつた。山から引いてある笥の水は、木蔭になつた所で、樋の口から綺麗に、そして涼しい音を立てながら箱の中へ落ちてゐる。それが眼の前で踊つてゐるやうに見えた。

山の上から下りて來た一人の客は、私たちの前を挨拶して通つた。どこへ腰をかけたやうかとしてゐるらしかつたが、どうとう私の側へ腰を下した。

席を少し譲つて、そしてそこに脱ぎ棄て、あつた糸だてをこちらへ引き寄せてやると、旅人は嬉しさうに禮を言つた。

登山者だな、と私は思つた。背廣に半ズボンをして、脚絆に足を固めてゐたが、其の半ズボンも脚絆も、長途の旅をした人のやうに破れてしまつてゐた。それより

も、手に提げて来てそこに立て懸けた杖は、杖の先へ齋口のやうな形をした、や、大きい、そして先の二つに割けた金物を附けたものであつた。岩に引つけて山に登ることも出来れば、植物の根を掘らうとしても便利なもの、やうに見えた。い、物だと思つた。

『失禮ですが、東京からですか？』

旅人はさう言つて聞いた。顔は日にやけて赤くてらく／＼としてゐて、鼻の頭の皮がむけて居た。が、その明るい、感じ易さうな眼にも、軽く、滑かな言葉の調子にも、都會の人からでなくては受けられない快さを持つてゐた。

『え、』と私は答へて微笑した。

『東京は何んな容子でしょう。すつかり容子が分らなくなつちまひましてな。』

『さあ。』と私は返事に當惑して、強ひて笑つた。

相手も、無理な質問だと心附いたやうに笑つた。

『支那問題は何うになりましたらう？』

※

『え、』此れは間もなく解決するだらうつて話でしたよ。政府も、浪人會も、どちらでもい、から早く形を附けさせてしまはなくてはならないつて點で一致してゐるといふことを聞きましたがね……』

旅人は頷いて、

『私はもう三十日間山の中にばかりゐまして、昨夜上高地へ下りて来て久し振りでの顔を見たんですから。』

『三十日！』と私は眼を見張つた。『大變ですね。』

『今年(こし)は加賀の白山から始めて、九千尺以上の山を十六渡つて歩きました。その間人の顔を見たことは、たつた一度きりでした。一度は或る小屋で、新聞の半べらを拾ひましてね、皆でうばひ合つて覗き込んで讀みました。其の次には、或る小屋から煙が揚るので、一人が居る！つてもので、皆でわあつ！と聲を揚げて駆け込みましたよ。人足の顔の日に焼けて、段々變つて來るのを見てをかしがつて笑ふんですが、自分の顔は分らないんですものね。』

『大變な御旅行ですね。』

私は驚いてその顔を見詰めた。……何ういふ人だらう。學者とも、官吏とも、會社員とも見えない此の人は、一體何ういふ人だらう？

『え、しまひには都戀しくなつて來ましてね、早く東京へ歸つて、先づ天ぶらを食べて、帝劇へ行つてと、他愛の無いことばかり考へましてな。さういふと、昨日は上高地で河原へ天幕を張りましたが、久し振りで茄子漬を食べて、おいしいうございましたよ。』

飯の菜にと、舅の家から持つて來た漬物を私たちは食べてゐた。

『失禮ですが。』と私は其れを出した。

『有り難う、頂きませう。』と旅人は手を出した。

『此れが上高知でもらつた寫生です。』

旅人は鞆の中から五六枚の繪葉書を出して見せた。それは天幕や、此の旅人やを寫生したものであつた。西洋畫家の書いたもので、そしてIといふ名が署してあつ

た。

『I君の繪ですか。』

『御存知ですか、あの髯達磨？』

『え、ちよつと。』

『さうですか。』と旅人は親しさうな眼をした。

旅人と私とは一二の共通な知合ひを持つてゐることを知つた。が、旅人も自身の名を言はない。私も言はうとはしなかつた。

別れしなに旅人は、

『おつけ下さい。』と言つて葉巻を一本出した。そして、

『失禮ですが、人足にお逢ひになりましたら、私がこゝで待つてると仰つて下さい』

茶屋を離れると、路は俄に峻しい上りになつた。今まではつと一緒に来た溪流はどこへかなくなつてしまつた。樹立の種類も違つて來て、楓、樅、榎などの森林が頭の上に暗く覆つた。

人足が三人、體の丈よりも高いやうな荷物をめい／＼に背負つて下りて來るのに逢つた。

私は傳言をした。

『有り難う。』と人足は丁寧にも人の好き／＼な笑顔を見せて、すた／＼と歩みを早めて下りて行つた。

『盛んな山登りがあるもんですね。一萬尺近い山を十六、山の中に一ヶ月……たいしたことですね。』

『何ういふ人でせうか。』

『さあ、何でせう。華族さんの若様の、蠻からな人とても云ふんでせうかね。』

私たちの會話は、足もとの困難なのに直ぐに消されてしまつた。息はきれて來る休んだばかりの背中にはもう汗がひや／＼と流れて傳ひだした。

上高地の谿谷

六七間ばかりも先になつて登つてゐた男は、振り返つて私を見た。そして、いたはるやうな調子で、

『頂上ですよ。』

と言つた。私はその顔を見上げてうなづいて見せた。

頂上と思ふと、私はほつとした。と、その邊の光景が初めて親しめるものゝやうに眼に映つて來た。

橡、桂、楓などの驚くべき大木が立ち續いてゐる下の急な路を私は登りつゝ、ゐた今その樹立は盡きて、明るい空が頭の上に見えようとしてゐた。樹立のない所は一面に眞つ青な笹であつた。その笹の中へ、すう、すうと、眞つ白な、それは雪のやうに眞つ白な幹をして、白樺の木が三四本立つてゐた。

脚を運ばせながら私は、登つて來た谷を見下した。よく登つて來たものだ、と私は第一にその急なのに驚いた。山の肌は這ひ上らなければ登れない程の急な傾斜を持つてゐた。そしてその傾斜の上には、やはり橡や桂かと思はれる、葉の眞つ青な

木が、すう／＼と幹を長く見せて立つてゐた。木の下も眞つ青な草が續いてゐた。そこから見ると二つの山の腹と腹とは近寄つて、一續きにならうとして居た。こちらの山の樹と、あちらの山の樹とは、梢はもう一しよになり合つて居た。頭の上では鳶が一羽、高い音をして啼いてゐた。それがしんとした山から谷に響いた。

頂上だ、と思ふと私は一つの記憶を胸に浮べて來た。それは先輩の一人の文章の中の一旬で、徳本の頂きに立つて初めて徳高を望んだ時には、脆いて拜まなくてはゐられない氣がした、といふ意味の句である。それを思ひ出すと直ぐに私の心持は、今眼の前にあらはれようとしてゐる不思議な瞬間に向つて憧れた。

その瞬間は來た。

私はとう／＼徳本の頂きに立つた。眼を放つて前方を眺めた。穂高岳、と一つの山を見ると同時に思つた。その山は、日本アルプスの連峰をうしろに、梓川の川原に裾を曳いて、たゞ一つ

立つてゐた。圓錐形をしてはゐるが、岩山の持つ限らない變化を包んでゐた。黒ずんだ木立を纏ひながらも、どころ／＼こげ茶色の肌をあらはしてゐた。頂きから裾へ亘つて垂直に二筋三筋附いてゐる襞は、際立つたこげ茶色をして、ざら／＼とか／＼やいてゐた。その上の方には、雪がしろ／＼とほのめいて居た。

河原はしろ／＼と、花崗石の多いことを思はせた。

力があふれて動き出しさうに見える山と、柔かな、消えさうに見える河原とは一しよになつて、今まで過ぎて來た境とは全く何の關係もない新しいすがすがしい境になつて居た。

曇りを帯びてゐた穂高の一面に、つと赤みが、つた光線が射して來た。空にはまだ灰色の雲が一面に籠めてゐて、ゆるく動いて居た。

言ひ現はし難い美しさど力とは、そこに凝つてゐるやうで、私はその山から眼を離すことが出來なんだ。

黙つて展望に耽つてゐた眞は、

『あの木が無いといふがね。』と呟いた。山腹の樹立は、丁度私たちの視線の一部を遮るやうに梢を浮べてゐるのであつた。

『さうですね。——それに休める所がありませんね。』

私はあたりを見廻してさう言つた。そこには多くの峠の頂きのやうな平がなかつた。それに倒れたまゝの大木は、糸だてを敷きたいと思ふあたりを奪つてしまつて居た。

『妙だね。頂上へ來たら居ないかと思つたに蚎がゐる。』

舅はさう言つて、扇子を開いて眼の前を拂つた。曇つた日に平野に出る蚎は其所にもゐて、眼にもとまらないやうな細かい點になつて、顔をねらつては飛び廻つて居た。

『下りませうかね。』

私は不思議な谿谷に引き寄せられるやうに感じて言つた。と、眼はまたと見られないものを見るやうに穂高に走つた。

『あゝ。』と言ひながら舅も直ぐには動かうとしなかつた。そして何か考へてゐるらしく見えた。

『……何うも方角が變だ。あの砂の白い工合から見ると、烏川の上流のやうな氣がするが……、それにするとちと變だ。』

さう言ひながらも舅は歩み出した。私もつゝいた。

急な下り路は眼の下につゝいた。角のある石は路を埋めてゐて、草鞋の底を噛んだ。一あし一あしが疲れた體に響くやうに感じた。——私たちは足もとにはかり氣を取られてしまつた。

私たちは丸太の組んだもので路の横切られてゐる前に立ち止つた。何の意味のものとも分らなかつた。分らないのが不安になつた。

『何でせう?』

『あ、馬や牛の出ない爲のませ棒だ。』

舅はさう言つて、その丸太に縋つて崖を越した。

路は森林の中についた。樵かやの大木は空を青黒くした。木下には草が少なくなつて朽ち木のにほひが漂つてゐた。一と抱へにも餘るやうな大木が、根を地の上にあらはして倒れてゐた。その上にまた大木が倒れかゝつて居た。

さら／＼と水の音がまた聞え出した。

つひに森林は明るくなつて來た。と青々として柳の林があらはれて、その青葉をすいて空が見えた。こげ茶に光る穂高の一角が、直ぐに頭の上に見えた。

路に沿つて小屋が一つ立つて居た。それは可なり大きなそして古い小屋で、戸は皆な閉ぢられてゐた。今朝から歩きつゞけてゐて、たゞ岩魚どめの茶屋を見たきりの私たちには、家の形をしてゐるといふだけで、その小屋もなつかしいものでいもあるやうに眼にとまつた。

木かげに白く標示杵が立つてゐた。「右は槍ヶ岳道、左は温泉道」として、その下に「一里」と記してあつた。

右の路は岩山の腹につけた崖道であつた。私たちの行かうとする左の路は、山裾

に沿つて、明るい林に向つて居た。

『あと、一里ですかね。』私は俄に脚が軽くなつたやうに感じた。

『これが番小屋の譯だ。』と男は呟いた。

馬小屋といふ名は、岩魚どめの茶屋で聞いた名であつた。妙な目じるしだどその時には思つた。

小屋の前を通り抜けようとするど、ひよいと小屋のうしろから、黒い子馬があらはれ出た。と、あとから又一匹あらはれた。又一匹あらはれた。

放し飼ひにされてゐる子馬は、三匹でかたまつて、そこへ立ち止つて私たちを眺めた。雨に打たれて野にばかり寝てゐる馬は、瘦せやつれてあはれに見えた。おどなしい眼には、人なつかしさうな色が見えた。

『可愛いものですね。』と、それ以上近寄つては來さうもないのに安心して、私は立ち止つて、ちつと見返した。ふと、鼻づらを撫せてやりたいやうな氣がした。

徳本の峠の頂きから見下した時の谿谷の感じは次第に深く、次第に親しくなつて来た。

その裾の細路を歩いてゐる山は、仰向きに首をそらしても、その頂きに見えないやうな岩山であつた。ところ／＼黒く茶にその肌をあらはしてはゐるが、全體は青黒い常盤木に蔽はれてゐた。その木は、たゞ一種のやうで、殆ど色の變化を見せなかつた。そして又、枝を四方に張ることは出来ないやうに、一本一本、まるくこんもりと笠のやうになつて、その笠を重ならせてゐた。

その暗く、荒い山から眼を移すと、崖に立つた柳の大木の梢をすいて、しろ／＼とした廣い河原が見渡された。河原の真ん中には、水が割合に細く、眞つ青な色をして流れてゐた。山川ではあるが瀬は不思議に静かで、岸に近い方で白く碎けるばかり。清らかな瀬の音を立て、ゆるくうねつてゐた。

河原を越したあちらの穂高岳は、動き出さうとするやうに見えた強さは隠してしまつて、嚴かに、静かに、その姿を仰がせた。そしてその山のうしろに續いてゐる

や、低い濃緑の山勝を見せて来た。

明るく、静かな、——高原を外にしては何所でも見られないやうな光線と空氣とは、その谿谷に満ちてゐた。それは曾て亂されたこともなく、おつと保たれて来たもの、やうにも見えた。しら／＼と、我どふるへるやうな光線は、その山と山とにかざられた、薄青い、澄んだ空に流れて、濃緑の山の腹に消えた、そして河原の兩岸のうす緑の樹立と、うす白い石と青い流れとの上で初めてかゝやいた。

小鳥の聲一つ聞えては來なかつた。岩魚ごめの茶屋で、山を下りる人を見たぎりもう長い間人の顔も見えないやうな氣がした。限りなく聳えてゐる峰と、樹立と、流れと、たゞそれだけのもの、生きてる世界である。そこへ私たちは今闖入しつゝゐるといふやうな氣がした。

さみしく見えた子馬の顔が胸に浮んだ。もつと居ないかと探すやうな心持で私は向うを見た。——花崗石の細かくくづれた砂は、細い路になつて、さみしく續いてゐるだけであつた。

一あし先へ立つて歩いてゐる眞は、をりをり山の方を見上げては樹立に注意するらしかった。

『もう樹齡の盡きさうな木が随分ある。』

眞は振り返つてさう言つた。その言葉の中には驚きの情があつた。私も樹立を見た。その邊は榎の木が多かつた。黒い幹はそれ程太くはなかつた。が、それらの木の立つてる土の一點を見ると、思はず眼を見張つた。

そこは土がくづれて、小さな斷層をしてゐた。ど土と見た思つたのは、小さく割れた石の積み重ねであつて、その上に薄く、落ち葉の朽ちたのがかゝつてゐるばかりであつた。大きな樹は、根をその石の上に置いてゐるので、深くはひることが出來ずに横に擴がつてゐた。網のやうに見える根と根とは、互に倒れないやうに保ち合つてゐるのであらう。

『すつかり石山ですね。——あれ何れ位の木でせう。』

『五六百年、……もつとも知れない。』

『さうですかね!』と、私は山の樹立を見上げた。

路は白樺の林の中にはひつた。

しら／＼と雪のやうに白い幹は、眞つ直に、下枝を持たずに立つてゐた。梢にあつて、うす青い、小さな、まるい葉は、長い葉柄に保たれて、傘をひろげたやうになつてゐた。幹と幹は立ち並んで、青葉の傘と傘とは重なつて行つた。日光はうす青い葉を照して、林の下を明るくした。下草は緑がうすく、露の乾かない間に見せるやうな鮮かな色をして細くつゞいてゐた。

木立と草の間に、一筋の路は眞つ直につゞいて居た。

山からは離れてゐた、河原も見えなくなつた。明るい路を歩きながら私たちは、丁度庭の内でも歩いてゐるやうな軽い心持になつた。

狭い流れがあらはれて來た。その水も眞つ青であつた。暗い緑の藻が岸に近い水の中に揺れてゐて、その上には、米つぶ程の眞つ白な花が附いてゐた。

とび／＼に、濃緑の細かい葉をもつた木が、低く、寂びた形をして立つてゐた。その木には青い小さい實が一杯に附いてゐた。

『何でせう、この實は？』

『山梨子のやうだ。……秋になると山の方から賣りに来るが、此れだね。』

ぼち／＼と歩きながら舅と私とは言つてゐた。と不意に、近い所から鶯の聲が朗らかに聞えて來た。振り返つて見たが、どこからとも分らなかつた。うす青く空を遮つた葉と、白い幹とは、踏んで來た路を隠してしまつて居た。

私たちは佇んでしまつた。

林の中から人が二人出て來た。漁師と見えて、一人は網を、一人は小さな毛皮の附いた竿を擔いでゐた。

『今日は。』

漁師は見知り越しの者にするやうに私たちに挨拶をして、白樺の路を遠くへ行つた。

『あれは岩魚を取る道具で、あの竿を川へ入れると、岩魚は瀬が來たと思つて慌てゝ逃げると、あの網へかゝるつて仕懸けになつてる。』

『へえ。』と私は笑つた。『簡単な考へですね。』

それだけの事を繰り返して、この山の中に生きてゐるのかと思つて、私は漁師の行つた方を見た。黒く、小さく、並んで歩いて行く二人の後姿は寂しく見えた。

休んでゐると、深い疲れは、丁度水が土を浸すやうに體をつゝんで來た。心は暗くなつて、美しい林も、澄んだ空氣も、次第にさみしく感じられて來た。

私たちは歩いてゐた。

『もう宿が見えさうなもんですね、一里位は歩いたやうな氣がしますがね。』

舅は時計を見た。

『もう五時近い、豫定よりも三四時間遅くなつた。』

樹立を透いて河原が見え出した。川に架け渡した白い橋がちらりと見えた。ペンキ塗りらしい橋は、場所柄なので不思議に感じられた。

私たちは間もなく橋を渡つてゐた。それは吊橋であつた。やはり白ペンキで塗つてあつた。

私たちは思はず立ち止つて、眼を前後に放つた。初めて谿谷の真ん中に立つた私たちは、第一にその廣さに驚いた。河原をとめた眼は、それを呑んで隠した山と山とに移つた。空は斜めに見上げる眼にやゝ眞深く映つて来た。ゆるやかにうねつた流れは、白樺と柳との洲をめぐつて、その蔭からのやうに輝きながら流れ出した。そして橋の下で白く碎けて鳴つた。眼を移すと穂高は直ぐそこに、あからさまに裾を見せて峙立つてゐた。焦げ茶の肌は、ざら／＼と痛さうに光つてゐた。頂きに近い雪は光を隠して冷たさを見せた。

流れの下の方を見ると、そこらは更に廣く明るかつた。米點の山水畫に見るやうな山は、峰と峰とを並べて立つて、その下のうす青い林と、濃青く平らに流れる流れとを見下してゐた。それに對した山脈は、暗緑に煙りつゝ遠く續いて、その端に突ど一つの、赤くかゝやく山を見せて終つた。流れの末——平行した山脈と山脈と

の抱いてゐる空にあたつて、圓い二つの山が、濃く、うすく、穩かに立つてゐた。

下流の方に、ぼつと一つの家が見えた。河原を前に、山を後ろにした一つの家はさみしく懐かしく望まれた。川岸に沿つて生えつゞいてゐる低い柳は、その家を隠すやうにして、ちら／＼とまだ新しい白木の色を見せた。

『あれですね！』

『あゝ。』

見えないのを怪んで、絶望したやうな氣分になつてゐた私は、その家を見ると、行き暮れた旅で人家を見かけたやうな感じを與へられた。

橋を渡りつくすと、そこは山裾の草原になつてゐた。草原と、川岸の並木との間に、眞つ直に細い路は走つてゐた。

低い柳と白樺は、河原は隠してはゐるが、澄んだ瀬の音を耳近く聞せた。草原の上には、すい／＼と丈の高い、莖も葉も柳に似た、紅の花を持つた花が一面に咲いてゐた。

雑木に蔽はれた岩山が眼の前を遮つた。その下をめぐるど、つと家はあらはれた家の前に、棟を低く、別に建て、ある所から、ほのかに湯気が洩れ出してゐた。その上の二階屋は、障子が閉められて静かであつた。

志して来た宿の前に私たちは着いた。それはたゞ一軒の大きな平屋があつて、入口の兩側には甲掛の附いた草鞋が一面に懸け連ねられて居た。帳場と並んで、田舎風の廣い板の間が見えて、そこには大きな圍爐裏がつて、太い丸太が、赤々とうす暗い中に燃えて居た。

帳場の上り框に腰を掛けて、宿屋の浴衣を着て、背中へ獵帥の著るくら猪じんの皮を著た人が居た。I君だ、と私は餘所ながら見た日の記憶と、岩魚どめの茶屋で聞いて来たことゝをたよりにきめた。

「入らつしやい。」I君ははいつて行く私たちを眼で迎へながら云つた。——あの髯達磨、と岩魚どめの茶屋での人の云つた言葉がふいと思ひ出された。

「お勞れでせう。」と髯達磨は、いたはるやうに云つた。

「えゝ。」と云つて私は微笑したが、直ぐに押しつぶされるやうに上り框に腰をおろしてしまつた。

云はうか、云ふまいかと躊躇した時には、私の口からは言葉が出てゐた。

「失禮ですが、あなたI君ですか。」

「えゝ。」とI君は丸い眼を更に丸くして、物を尋ねるやうに私の顔を見た。

「あなたは？」

「私はKつてものですが。」

「あゝ、さうですか。」

知るまいと思つた私の名をI君は知つてたらしく、眼を躍らせた。そして、

「I君も来てゐますよ、昨日白骨しほほねの方から廻つて來ましてね。」

「I君が！さうですか。」

こゝでI君に逢はうとは私は思ひがけなかつた。

宿の主人も出て來て迎へた。私は草鞋の紐を解きながらI君に云つた。

「何時でしたか田端の倶楽部へ行きましてね、K君から、あれがI君だつて教へられた事がありました。そして今日も途中で、あなたがこゝに入らつしやる事を聞きましたよ。」

『さうでしたか——』

洗足の湯は快く足に染みた。

『一番へ御案内を。』

主人に云はれて女中は先に立つて案内した。私たちは糸だてと大きな麥藁帽子を抱いて女中の後へ附いて行つた。

それは二階の、河原と山とに向つた部座であつた。

『疲れましたね!』

私はあぐらをかいて、さう云つたきり、もう體を動かす元氣も無かつた。頭が少し重いやうに覺えて、背中にも悪寒を感じた。水を飲み過ぎたな……と私は思つた。女中が運んで來た浴衣も、茶も、私はぼんやりと眺めてゐるばかりであつた。

田 代 沼

『田代へでも行きませんか。』

畫家のI君は、ぶらりと私たちのある部屋の前の廊下へ出て来て、眼の下にひらけてゐる梓川の河原と、河原を越して、仰向いて見上げるやうな險しさをもつて聳えてゐる霞澤岳の方へ眼をやつてゐたが、そつと部屋の中を見入るやうにして言つた。

私はI君の顔を見上げて、微笑しながら、

『行きたいもんですね。』

と言つた。田代を見たいといふよりも、昨日の夕方此所へ来て初めて知合ひになつた畫家の、恐くは自身には珍しくもなからうと思はれる所を、案内して見せてやらうとする其の心持が感じられたからであつた。

私は鼻の方へ眼を移して、

『行きませうね。』

といつた。家から持つて来た昔風の遠眼鏡の筒を眼にあて、今朝から一心にない

つて霞澤岳の頂上を眺めてゐた男は居ずまひを直して、そして其所に擴げてあつた登山地圖を疊んでゐた。

『結構ですな。』

『では直ぐ行きませう。』

I君は廊下で續いてゐる自身の部屋へ引つ返した。

帽子や煙草を持つて私たちも廊下へ出た。I君は普通の麥藁帽子を持つて待つてゐた。

『I君誘つて見ませうか。』

私はI君に云つた。

『え。』

どI君は、穏かな微笑を浮かべながらも、素つ氣の無い調子で云つた。

畫家のI君が、私の古い知合ひの一人に數へるべきI君が此所に來てゐることを私は此所へ來てI君から聞いて初めて知つた。そして思ひ懸けない所で思ひ懸けな

人に逢ふものだとその奇遇に驚いたのであつた。I君の部屋はI君のと並んでゐた。廊下の外から帶戸をノックすると、I君は帶戸を細くあけて顔だけ出した。眼^{まぶた}が少し腫れぼつたくなつて、今まで俯向いて讀書でもしてゐたやうに見えた。私は背の高いI君の顔を見上げるやうにしながら誘つた。

『行きませう。』

I君は物靜かに云つた。そして部屋から出て來た時には、私たちと同じやうな鍔の廣い麥藁帽へ、紅と黄とで、何所かの土人の帽子にでもありさうな模様を描いたのを被つてゐた。そして手拭を疊んで、ネクタイのやうに襟に巻いてゐた。

階下の帳場の邊はひつそりとしてゐた。ごた／＼してゐた昨夜の客も、今朝はもうそれ／＼志して來た山を向つて行つてしまつたらしい。

『草鞋ですか?』

ど私はI君に尋ねた。I君は首を振つて打消した。

『直ぐ其所です。近いんです。』

と云つた。

私たちは温泉宿の貸下駄の、砂にまみれたまゝ土間にころがつてゐるのを拾つて穿いて出懸けた。

出しなに鼻は、其所にとつさりあつた杖の一本を持つて出た。

温泉宿の前から、一すぢの細い路は低く生えた青草の上にあらはれるた。草原は直ぐに白樺と、榛の樹と、柳とが、丁度若葉の頃のやうな薄く柔かい緑を重ねあつてゐる密林の下へまぎれ込んでゐた。

密林を越えて、西には硫黄岳、東に霞澤岳が仰がれた。樞や柵ばかりと思はれる暗緑をもつて蔽はれた山は、険しく、高く峙立つて、相對しながら南の方へ續いてゐた。その上に、うす青く、顛へるやうな鮮かさをもつた空は、高く、細長く、山の頂上を貫く線にかざられつゝ澄み入つて浮んでゐた。

日光は靜かに、ちら／＼と顛へながらも注ぎ落ちてゐた。

白樺は、幹も小枝も白々と雪のやうに見えた。柳の葉は銀にひらめいた。路に沿つた青草は、緑がうすく、その一本一本の根元まですつきりと見せてゐた。

一列になつて黙つて歩いてゐた私達は、間もなく密林の中にはいつた。一番先に立つてゐるまん丸くふどつたI君、二番目のひよる長いT君、小づくりの鼻、一樣に白地の棒縞の温泉宿の貸浴衣を着た後姿が林の中に小さく紛れ込んだやうに見えるのを見ながら、私は一番あとからついて行つた。

密林の樹立の大部を占めてゐる白樺は、伸び上ると漸く日光に觸れられるもの、やうに、その笠に似た枝葉を高く捧げてゐた。うす緑の細かな圓い葉は、日光に照らされた葉の裏を見せながら、屋根のやうにつゞいた。木下は白い砂地であつた。ところ／＼、鳥兜に似た紫の草花が咲いてゐた。

しんとしてゐた。其所には小鳥の聲も、虫の音もなかつた。全く音といふものを絶した靜かさであつた。

冷たさを含んだ空気は、明るい林の中に貯へられてゐたものゝやうに私たちの肌
に染みた。

その中から澄んだ瀬の音が聞えて來た。私たちの眼の前には、橋があらはれて來
た。

それは二三本の太い丸太を、丸木橋のやうに架けた橋であつた。兩方の橋の袂は
白樺の丸太を横に並べて、そして並べかけたまゝで止めてあつた。白樺の木は幾本
も、伐り倒されたまゝで林の中に横たはつてゐた。

それは梓川であつた。温泉宿の二階の私たちの部屋から眺めると、廣々した白い
河原の上を、群青いろになつてゆるやかにうねつてゐる流れは、この密林の中へは
いつて、狭められて、急な谷川の姿になつてゐた。

橋は、先へ渡つて行く者の歩みで、ゆら／＼と揺れた。足場も定められないやう
であつた。私は先の者の渡つてしまふまで立ち止つて待つてゐた。

脚の下の低い所で、澄みきつた水は柔かな青磁の色になり、眞つ白な雪に碎けな

がら走つてゐた。その水を透いて、大きな石の聲を立てゝゐるのが見えた。歩みと
共に橋板はゆら／＼とゆれた。

渡つてしまふと、私は橋を振り返つて見た。しろ／＼とした橋には、日光が明る
くさしてゐた。

密林は絶えた。

其所は、丈の低い笹原となつてゐた。日光はさほるものもなくその笹の上に注い
でゐた。笹原の中にはところ／＼、態ど石を組み上げたやうな小高い所があつた。

その上には、花欄に似た、濃緑の細かい葉を密生させた丈の低い木が、樹齡を思は
せるやうなくねつた恰好して立つてゐた。その葉の間には、小さな青い果がすゞな
りになつてゐた。その影は笹原の上に落ちてゐた。

笹原の中には細い路がついてゐた。踏み分けて行く足にさはつて、笹の葉はさら
／＼と鳴つた。

私たちの眼の前には、水があらはれて来た。笹原は盡きて、路はその水に沿つて築山のやうになつた小高い上へ上つて行つた。

私たちはその上へ登つた。

「君は振り返つて、その眼に微笑を浮べながらいつた。」

「此れが田代です。」

「へえ！いいですか。」

舅は杖をついて、その上に両手を重ねてずつと見渡した。

私も舅と並んで沼を見渡した。

それは沼とはいふものゝ、山から湧き出して来る清水の、自然に此所の低地を見出して、流れ寄つて湛へてゐる水であつた。青く、透き通るやうに澄んだ水は、細長く、奥深く續いてゐて、疎らに立つた落葉松と見えるさみしい樹立の中に曲り込みつゝ隠れてゐた。水の中には、小さな中島が、態と拵へたやうに浮んでゐた。その島には落葉松、石楠、それに珍しく松などが生えてゐて、自然と寂びた恰好にな

つてゐた。

同じややうに中島は、小さく飛び／＼に幾つも浮んで、それ／＼の形をしてゐた中にはたゞ一つの岩とも見えるのもあつた。

沼の上には日光がまともな色で、青く澄んだ水を、明るくかゞやかしてゐた。そしてその明るさは、遠く沼を取り圍んでゐる樹立の上にまで廣がつてゐた。

沼の水は、私たちの立つてゐる築山に似た丘の下に沿つて、小川のやうに彼方に流れ出してゐた。其所は水底は一面の眞つ白な藻草であつた。細い柔かな青い絹糸を靡かしたやうな藻草の上には、眞つ白な、米粒より小さい程の花が附いてゐて、それだけが水の上に浮んでゐた。

水の流れは、かすかに動くと共に白くかゞやいて、そして其の花を動かした。

何所にも、一点の影といふものも無いやうに見えた。そしてその明るい水の上から湧いて来る涼しい氣は、日光に直射されてゐる肌に静かにもつれた。

『いいですか。一日見てゐても見飽きないつて景色ですな。』

庭好きの男は、暫くして又さう云つた。そして流れるやうな瞳を私に向けた。

『全くですね。』

と私はうなづいた。全くそれは庭であつた。私はその沼の景色の好いといふよりも、此の深山の中に隠されて、かうした明るい、かうした穏かな一點のあるといふことが不思議に感じられた。

Ⅰ君も並んで立つてゐた。静かに、物を見透さうとするやうな瞳は、沼から離れた。

『利休好みつて云ふんだな。』

呟くやうに云つてⅠ君は水際の方へ動いて行つた。そして、先刻から其所の青々とした柔かい苔の上に腰を下して、ぼんやりと水の流れるのを眺めてゐたⅠ君の側へ行つて屈んだ。

私もその側へ行つた。

Ⅰ君は呟くやうに云つた。

『もう僕は此所に飽き／＼しちまつた。晝は描く氣にもならないんだし、食物はあの通りだし……。』

と、Ⅰ君も呟いた。

『好いには好いが、妙に親しみの無い景色だからな。』

晝家の感動を繋ぐ自然の、私たちの見るものより遠く離れてゐることは幾度も思はせられた。が、眼を遣る何所にも驚きのある此の上高地も、此の人たちにはつまらないのか知らと思つた。

『いけないのかね、此所は？』

私はⅠ君に向つて云つた。

『かう、壓迫されるやうでな……』

Ⅰ君は澄んだ眼に、著しい暗い影を漂はせた。

『赤城はいゝな。』

「君はふとさう云つた。」

赤城が、關東の平野についたあの圓いばかりの山が……。

「君の赤城は古いもんだね。M君と君と行つたのは、もう十年位も前だね。」

「君は微笑を浮べた。」

「M君に赤城を悪く云はうもんなら怒られちまふ。——ラインの柔かな、展望のある、明るい好い山なんだが。」

さう云つて「君は足もとへ眼を落してゐたが、ふと、

「僕、赤城へ行かうか知ら……」

と獨語のやうに云つた。前方を見やつた眼は晴れくど明るくなつてゐた。

投げ出してゐる足も、胸も、日光で熱つて來た。黙つてゐる私たちの眼の前を水は涼しく流れた。

「あゝ。」

私は聲を立てながら水を見詰めた。つと水の上に落ちた影は、矢のやうに消えた。

「岩魚だ。」「君は平氣でいつた。」

私は裾をからげて、水の中へはいつた。水は針のやうな冷たさをもつて足を撫せた。

「此の藻は何んていふでせう？」

私は藻の花を摘んで、ちつと腰を下したなり動かずにゐる「君にいつた。」

「梅花藻つていふんですつて。農學士が教へましたよ。」

「成る程梅の花に似てる。」私は指の間につままれてゐる花を見た。

朗かに鶯の聲が聞えて來た。

「あ、鶯が……」

私は眼をあげて、明るい空を見廻した。沼の彼方の樹立を越して、霞澤岳は直ぐ其所に頭の上に峙立つてゐた。山を包んだ暗緑は、一本一本の眞んまるく枝を繁らせた樹立となつてゐた。そしてそれを透いて、黒い、赭い岩石の肌が見えた。

遠く彼方に平らに續いた密林を越して、焦げ茶色に焼け爛れた焼岳が、山頂だけ

をうす青い空に浮べてみた。
鶯はしんとした中にまた朗らかに聞えて来た。

明
神
の
池

谿谷の夜の静けさは、土その物の静けさのあらはれであつた。そこには生物の立てる聲といつては何一つなかつた。たまたまこの一軒家に來て泊つてゐる者の聲が聞えて來ると、それが都會では曾て感じた事のない力よわい、はかないものに聞えて來て、却つてその静けさの限り知られない深さを示すものとなつた。

私たち——谷君と舅と私との部屋は一番広い部屋だつたので、おのづから俱樂部どなた。こゝへ來て落ち合つた三人の畫家——T君、I君、M君なども、夜になるとみしみしと廊下にさみしい音を立て、集まつて來た。そして部屋の真ん中に釣つてあるランプの下へ圓を描いた。圓の真ん中には火鉢があつて、焚き落しの火が懐かしいものに見えた。舅の持つて來た茶と、宿で賣つてゐる駄菓子とが無上の馳走であつた。

雑談の種は豊かにあつた。不思議に藝術上の話だけは出なかつたが、その他でもそれからそれと話は續いた。そこにゐた誰も、それ／＼異なつた魅力をもつて話をした。その魅力は又そこにゐる者は十分に感じ合ふことができた。私たちの話はは